
ExtraView セットアップ・ガイド (Windows 用)

2008 年 2 月



改定履歴

Rev.	Date	Modification
[N]	2007-10-3	ExtraView5.2.2 向け ExtraView セットアップ・ガイド作成
[1]	2007-10-29	Oracle 10g のインストール方法とデータベースの作成方法を追加
[2]	2008-2-21	CD 内の構成に関する説明を変更

目次

1. はじめに	3
2. 準備	4
インストール関連ファイルのダウンロード	4
ExtraView.zip の展開	5
3. Oracle のセットアップ	6
インストール手順	6
新規データベースの作成	16
不要なサービスの停止	39
Oracle 表領域の作成	40
Oracle ユーザ(スキーマ)の作成	43
4. ExtraView ソフトウェアのセットアップ	45
ExtraView 本体のセットアップ	45
httpd.conf (Apache の設定ファイル) の設定	45
configuration.properties (Tomcat の設定ファイル) の設定	47
Tomcat の起動パラメータ設定	48
BatchMail のセットアップ	49
5. データのインポート	50
best_data のインポート	50
6. その他の設定	52
ExtraView ライセンスの設定	52
日本環境のデフォルト設定	55
7. 付録	59

ExtraView 環境のバックアップ	59
ExtraView 環境のリストア	61

1. はじめに

このガイドでは、「ExtraView インストール/構成ガイド」の補足として、Windows プラットフォームで ExtraView を使用する際の Oracle のセットアップ、ExtraView コンフィグレーション・ファイルの設定、データ (dmp ファイル) のインポート、ライセンス設定などについて説明します。このガイドを読む前に、必ず「ExtraView インストール/構成ガイド」をお読みください。

本文中に出現する Apache、Apache Tomcat (以下、Tomcat)、Perl、Java などの周辺アプリケーションについては、必要に応じてインストール済みであることを前提としています。

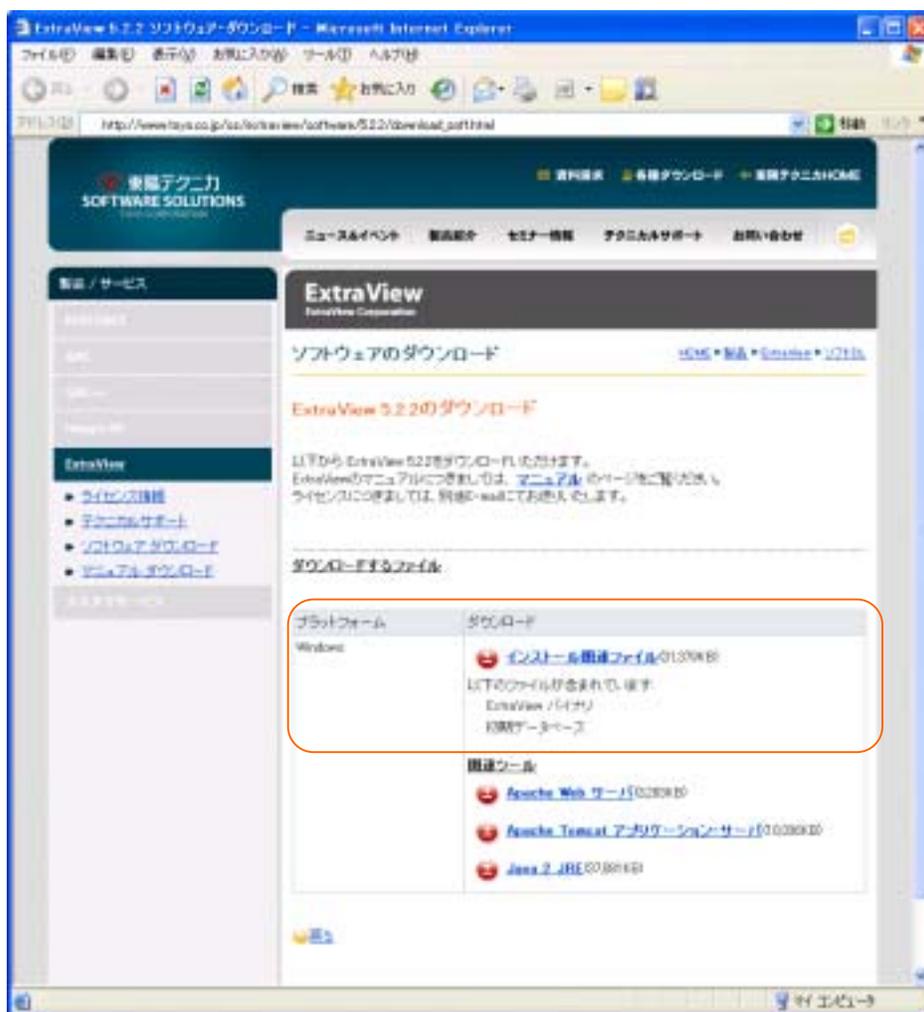
本文中、操作の説明やコマンドラインの実行例を示している箇所において、**Bold** で記述している部分は実際に開発者が入力する文字列を表します。また、*Italic* になっている部分は、実際にコマンドを入力するとき、必要に応じて適当な文字列に置き換えることを表します。

このガイドについてご不明な点などがございましたら、どうぞ遠慮なく、東陽テクニカのテクニカル・サポート (ss_support@toyo.co.jp) 宛にお問い合わせください。

2. 準備

インストール関連ファイルのダウンロード

東陽テクニカのホームページ (<http://www.toyo.co.jp/ss/extraview/>) から「インストール関連ファイル (ExtraView.zip)」をダウンロードします。アクセスするためのユーザ名 / パスワードをご存じでない場合は、東陽テクニカのテクニカル・サポート (ss_support@toyo.co.jp) までお問い合わせください。



また、東陽テクニカが提供する ExtraView の CD-ROM をお持ちの場合は、それをお使いいただくこともできます。

ExtraView.zip の展開

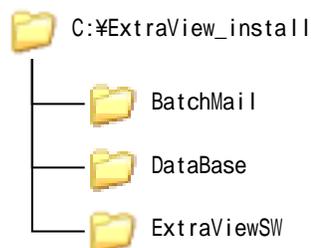
ここでは、ExtraView を C:¥ExtraView¥Tomcat5.0 配下にインストールするものとして説明します。C:¥ExtraView¥Tomcat5.0 は、Tomcat をインストールしたディレクトリを想定しています。Tomcat のインストールに関しましては、「ExtraView インストール / 構成ガイド」をご参照ください。

同様に、Apache については C:¥ExtraView¥Apache2 ディレクトリにインストールしたと想定していません。Apache のインストールに関しましては、「ExtraView インストール / 構成ガイド」をご参照ください。

インストール場所がこのガイドに書かれているディレクトリと異なる場合は、実際のインストール場所に置き換えて説明をお読みください。特別な理由がなければ、本書と同じ場所にインストールすることによって、セットアップ時の余計なトラブル（例えば、Apache や Tomcat の設定ファイルやバッチファイルは、ファイルパス中の空白文字を認識できない場合があります）を避けることができます。

以降の手順に進む前に、ダウンロードした ExtraView.zip を適当なディレクトリ（例えば、C:¥ExtraView_install）に保存し、zip 形式を展開しておきます。展開した結果、次のようになります。

ここで示す C:¥ExtraView_install ディレクトリは、単なる zip ファイルの展開場所であり、ExtraView のインストール先ではありません。ご注意ください。



なお、東陽テクニカが提供する CD-ROM の Software ディレクトリには、ExtraView.zip がすでに展開された形で格納されており、つまり、上に示した 3 つのディレクトリ BatchMail、DataBase、ExtraViewSW が、CD-ROM の Software ディレクトリ直下に存在しています。

3. Oracle のセットアップ

インストール手順

Oracle9i のインストール

ExtraView は、Oracle データベースの必要最小限のコンポーネントだけを使用しますので、以降のインストール手順においても必要なコンポーネントだけを選択します。

Oracle のインストーラを起動します。



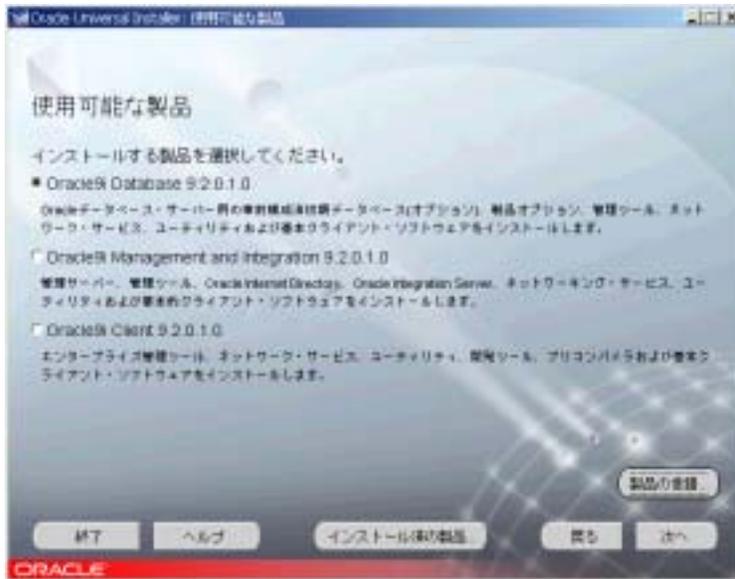
「インストールを開始」を選択します。



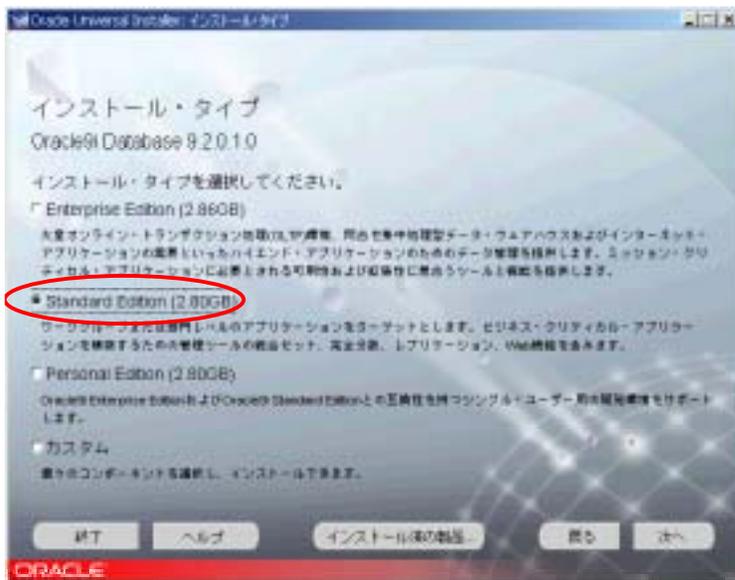
「次へ」をクリックします。



インストール先は特に指定がない限り、デフォルトのフォルダで構いません。「次へ」をクリックします。



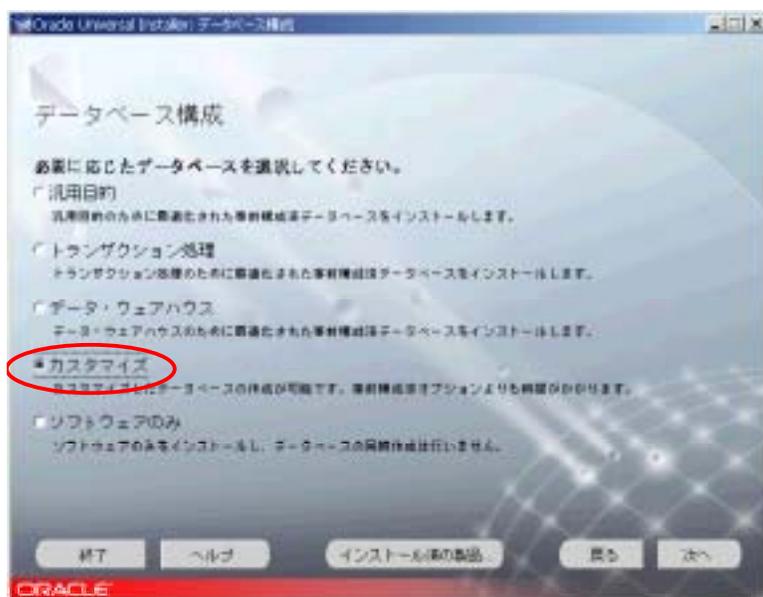
「Oracle9i Database 9.2.0.1.0」にチェックがついていることを確認し、「次へ」をクリックします。



Oracle をインストールする際、お客様が購入したライセンス (Edition) に応じて、Standard Edition か Enterprise Edition のどちらかのインストール・タイプを選択します。なお、Personal Edition は、まったく個人用にスタンドアロン環境で ExtraView 環境を構築する場合を除き、一般的な ExtraView 環境を構築する上で適切な Edition としてはお薦めしません。

インストール・タイプを選択する画面では、Standard Edition、Enterprise Edition のほかに「カスタム」をクリックすることができます。「カスタム」を選択するには、お客様が Enterprise

Edition の Oracle ライセンスをお持ちである必要があります。もし、お客様がお持ちのライセンスが Standard Edition であるならば、「カスタム」は選択しないようご注意ください。



データベース構成では、「カスタマイズ」を選択します。「次へ」をクリックします。

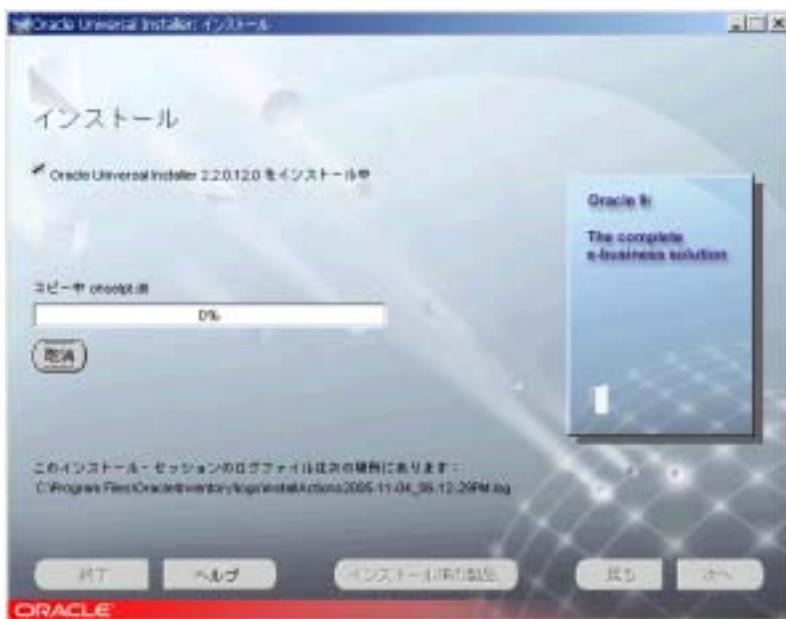


この画面では、そのまま「次へ」をクリックします。

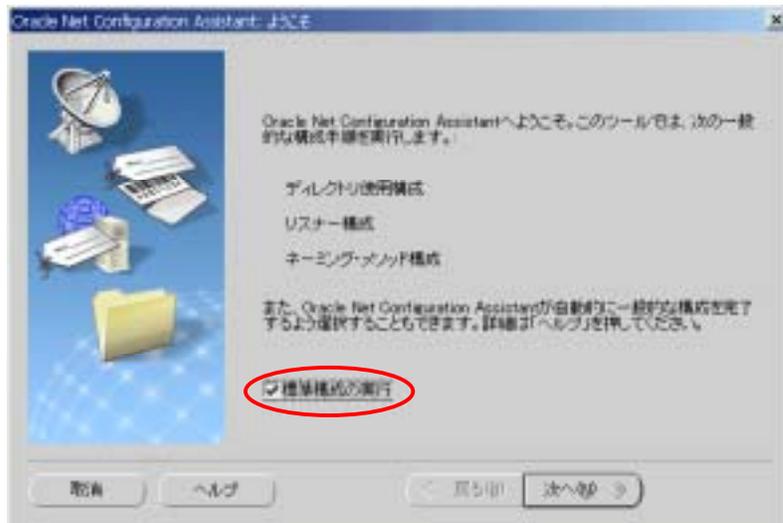
ExtraView にとって、Oracle Services for Microsoft Transaction Server は不要です。ただし、ここでそのインストールを拒否することはできないため、後ほどサービスを自動起動しないようにすることで対処します。



サマリーが表示されます。「インストール」をクリックします。



インストールが開始されます。途中で 2 枚目、3 枚目のディスクを要求するダイアログが表示されますので、指示に従ってディスクを入れ替え、「OK」ボタンをクリックします。インストールが終了したら、「次へ」をクリックします。

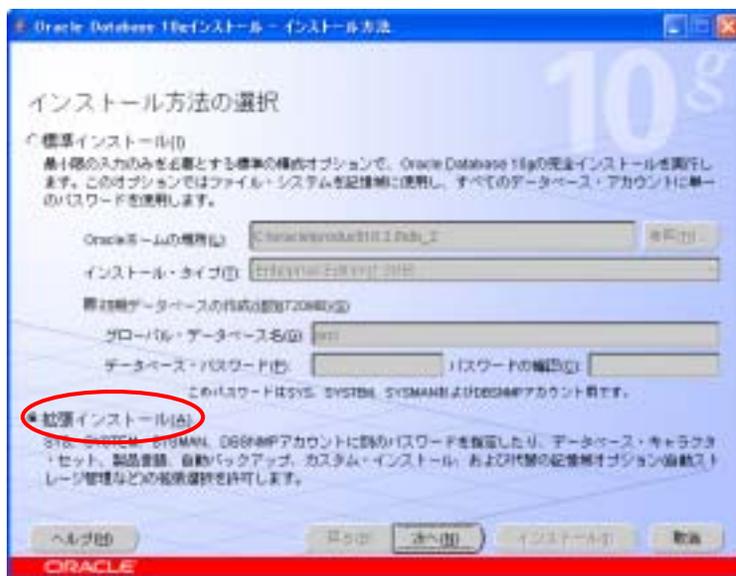


Oracle Net Configuration Assistant が起動します。「標準構成の実行」にチェックを入れて、「次へ」をクリックします。必要な設定を自動で行い、数秒で終了します。

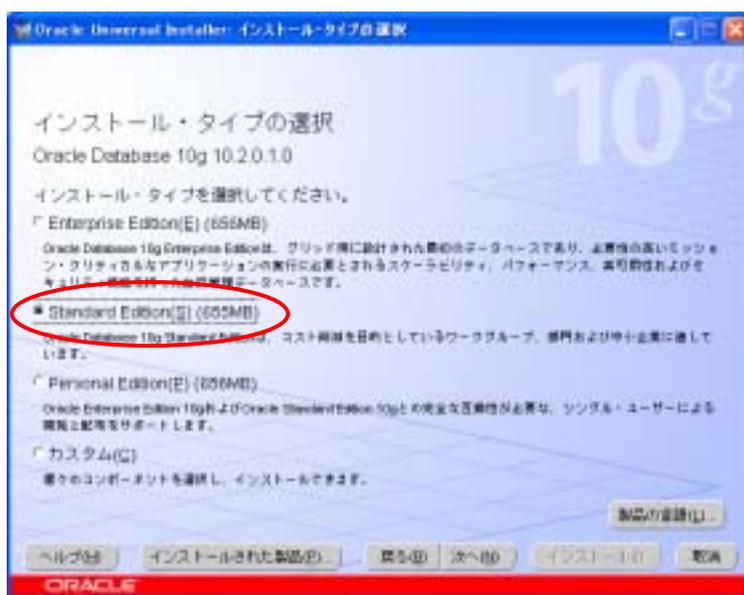
Oracle10g のインストール

ExtraView は、Oracle データベースの必要最小限のコンポーネントだけを使用しますので、以降のインストール手順においても必要なコンポーネントだけを選択します。

Oracle のインストーラを起動します。



「拡張インストール」をクリックします。



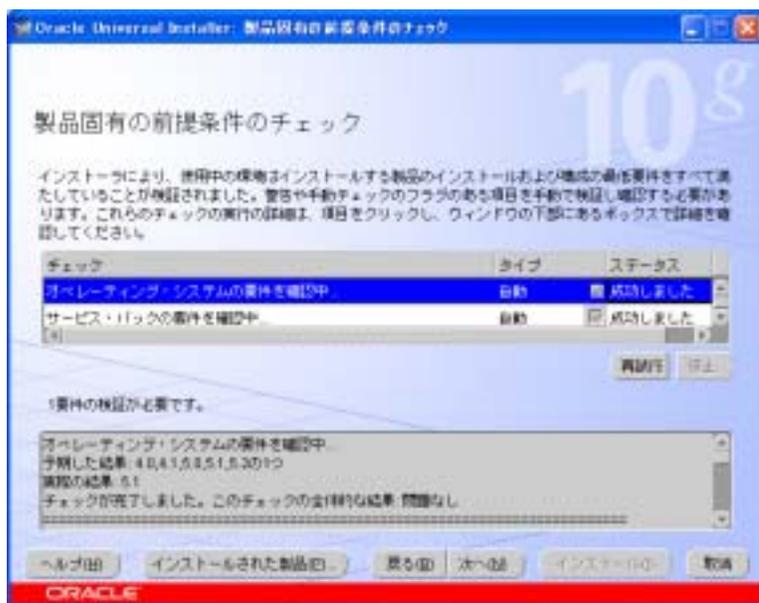
Oracle をインストールする際、お客様が購入したライセンス (Edition) に応じて、Standard Edition か Enterprise Edition のどちらかのインストール・タイプを選択します。なお、Personal Edition は、まったく個人用にスタンドアロン環境で ExtraView 環境を構築する場合を除き、一般的な ExtraView 環境を構築する上で適切な Edition としてはお勧致しません。

インストール・タイプを選択する画面では、Standard Edition、Enterprise Edition のほかに「カスタム」をクリックすることができます。「カスタム」を選択するには、お客様が Enterprise

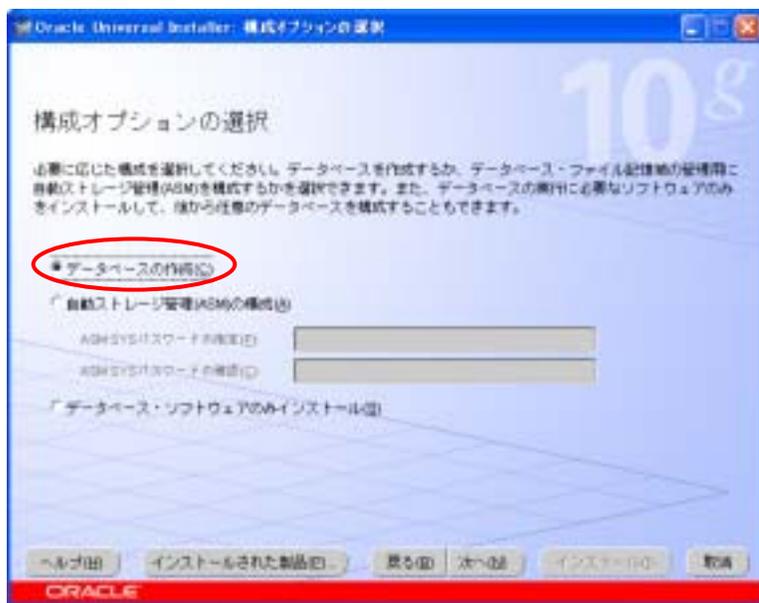
Edition の Oracle ライセンスをお持ちである必要があります。もし、お客様がお持ちのライセンスが Standard Edition であるならば、「カスタム」は選択しないようご注意ください。



インストール先は特に指定がない限り、デフォルトのフォルダで構いません。「次へ」をクリックします。



製品固有の前提条件を満たしていることが検証されたら、「次へ」をクリックします。



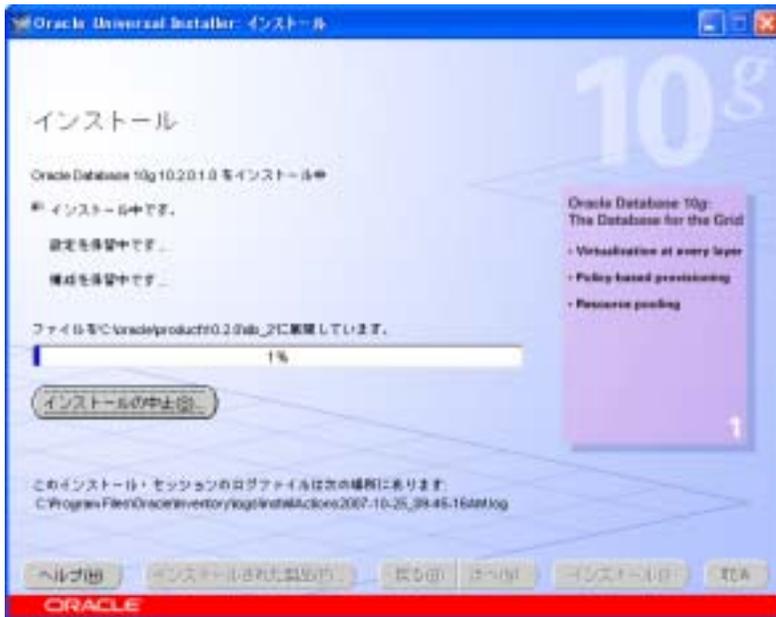
構成オプションの選択では、「データベースの作成」を選択します。「次へ」をクリックします。



データベース構成では、「詳細」を選択します。「次へ」をクリックします。



サマリーが表示されます。「インストール」をクリックします。



インストールが開始されます。途中で2枚目、3枚目のディスクを要求するダイアログが表示されますので、指示に従ってディスクを入れ替え、「OK」ボタンをクリックします。インストールが終了したら、「次へ」をクリックします。



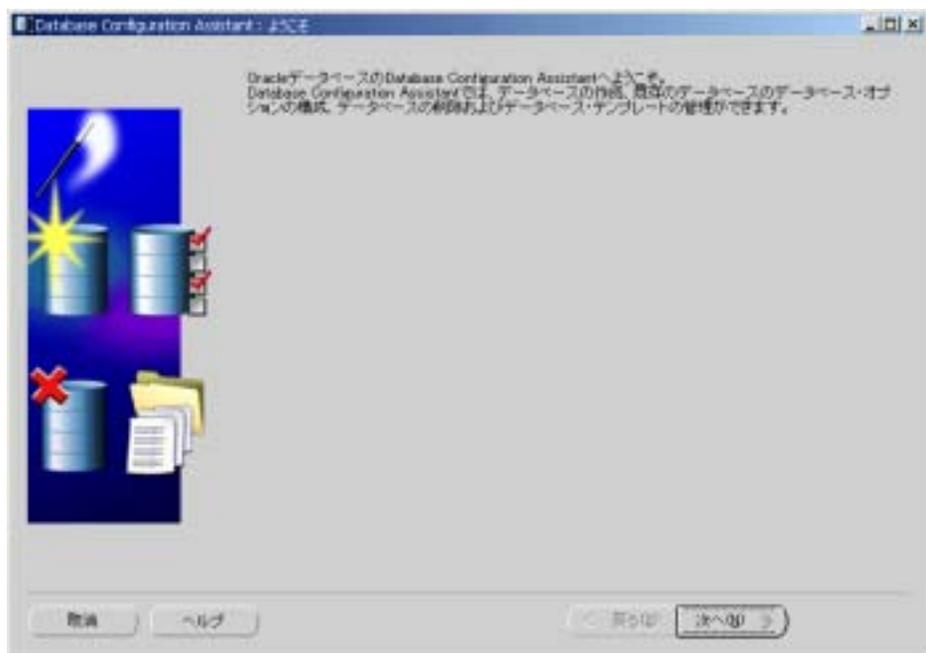
Oracle Net Configuration Assistant が起動します。必要な設定を自動で行い、数秒で終了します。

新規データベースの作成

Oracle9i のデータベース作成

「Oracle Net Configuration Assistant: ようこそ」画面で「次へ」をクリックすると、Database Configuration Assistant が起動します。Oracle がすでにインストールされている環境に対して ExtraView をセットアップする場合は、単独で Database Configuration Assistant を起動し、ここからの手順を実行します。

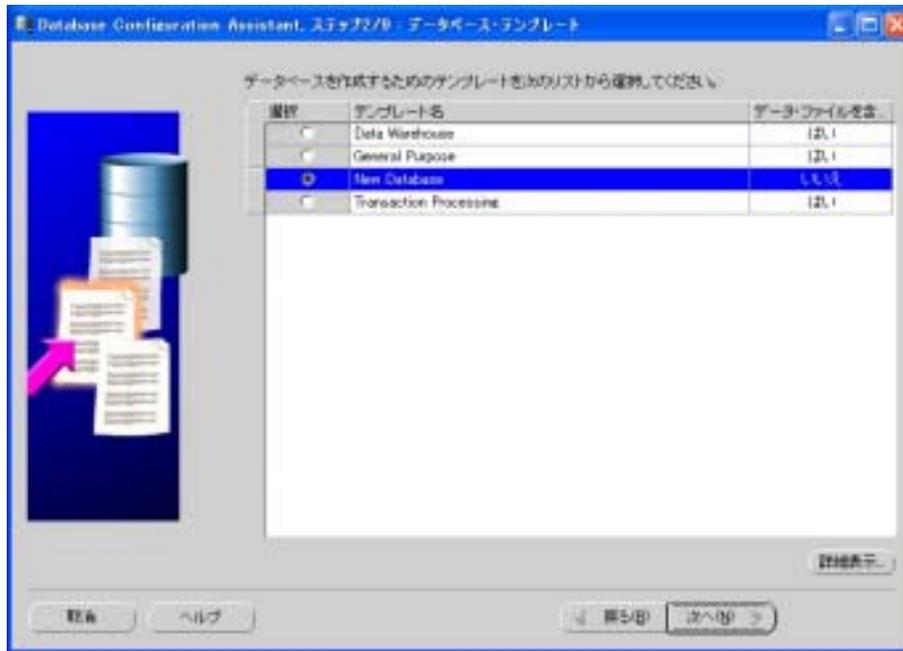
もし、データベース・サーバ上にすでにデータベースが構築されている場合は、別の新規データベースを作成するのではなく、ExtraView が使用するための Oracle ユーザ（スキーマ）を新規に作成してください。この場合は、「Oracle 表領域の作成」、「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」、「configuration.properties (Tomcat の設定ファイル) の設定」において既存の SID を使用することになります。Oracle ユーザ（スキーマ）の作成手順については、後述の「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」をご参照ください。



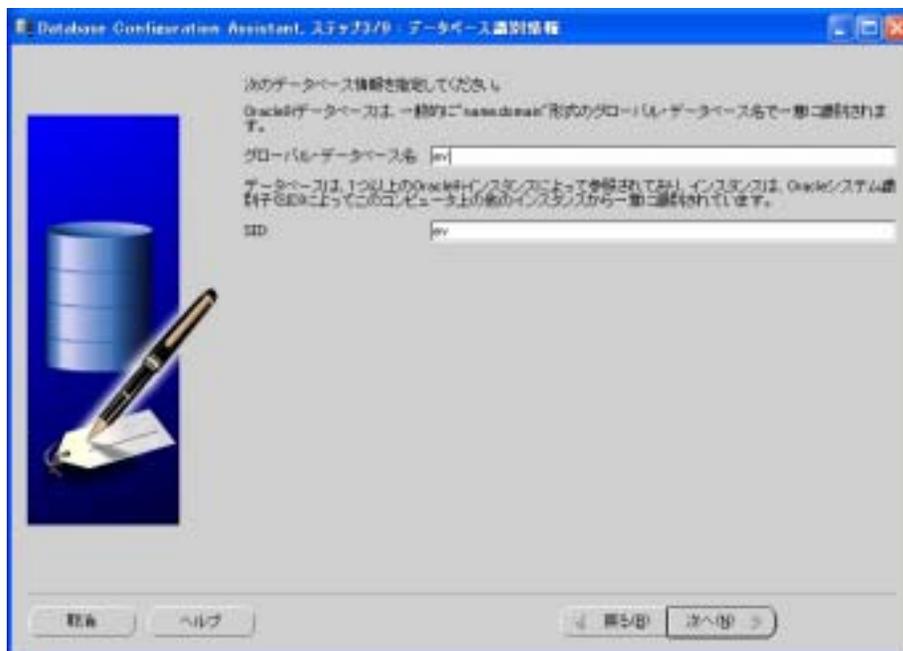
「次へ」をクリックします。



ステップ 1/9 : 操作 : 「データベースの作成」を選択し、「次へ」をクリックします。



ステップ 2/9 : データベース・テンプレート : 「New Database」を選択し、「次へ」をクリックします。



ステップ 3/9 : データベース識別情報 : 「グローバル・データベース名」を入力し（自動的に「SID」にも同じ名が入ります）、「次へ」をクリックします。

ここで入力したグローバル・データベース名（データベース識別子、すなわち SID）は、後述の「Oracle 表領域の作成」、「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」、「configuration.properties（Tomcat の設定ファイル）の設定」で使用します。忘れないよう、記録しておいてください。上の例では「ev」と入力しています。

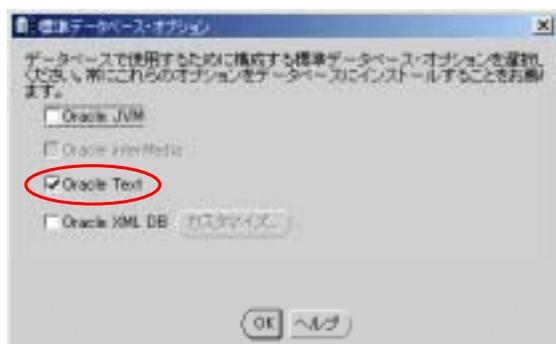


ステップ 4/9：データベースのネットワーク構成：「すべてのリスナーに、このデータベースを登録」を選択し、「次へ」をクリックします。

なお、Net Configuration Assistant を使って複数のリスナーを登録していない場合、「ステップ 4/9：データベースのネットワーク構成」のページは表示されず、以降のページ番号が 1 つずつずれずれます。

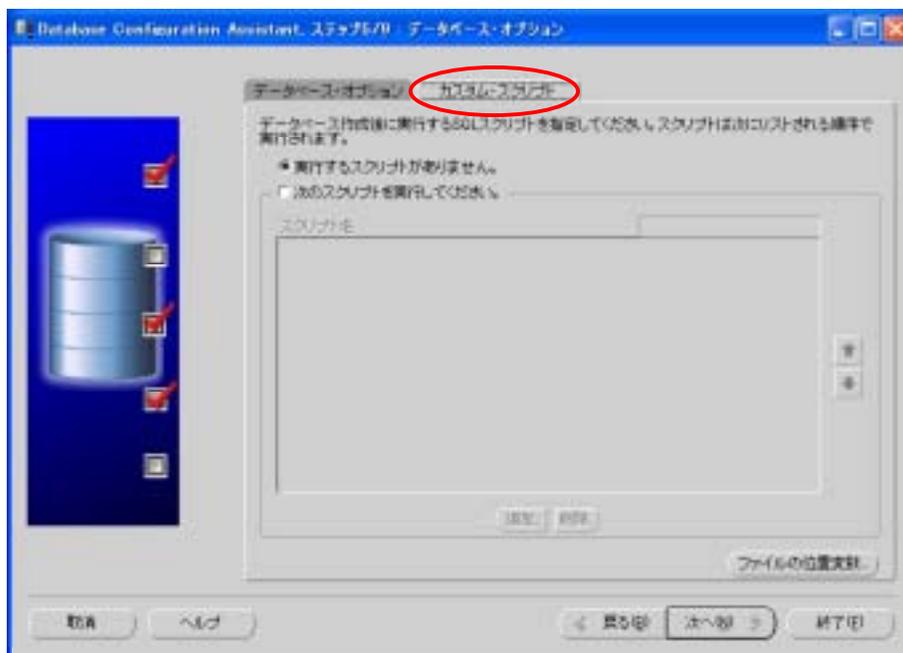


ステップ 5/9 : データベース・オプション : 「データベース・オプション」タブの、「標準データベース・オプション」をクリックします。



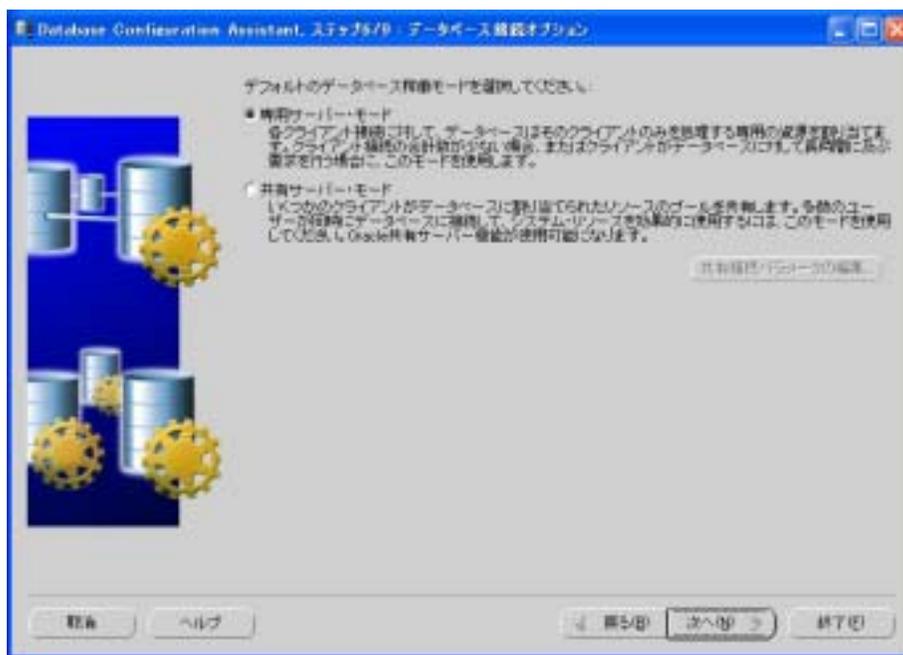
「Oracle Text」だけチェックし、その他のオプションはチェックを外してください。

オプションのチェックを外す際に、「表領域も削除しますか」というダイアログが現れるオプションがあります。そのようなダイアログが表示された場合は、「はい」を選択してください。

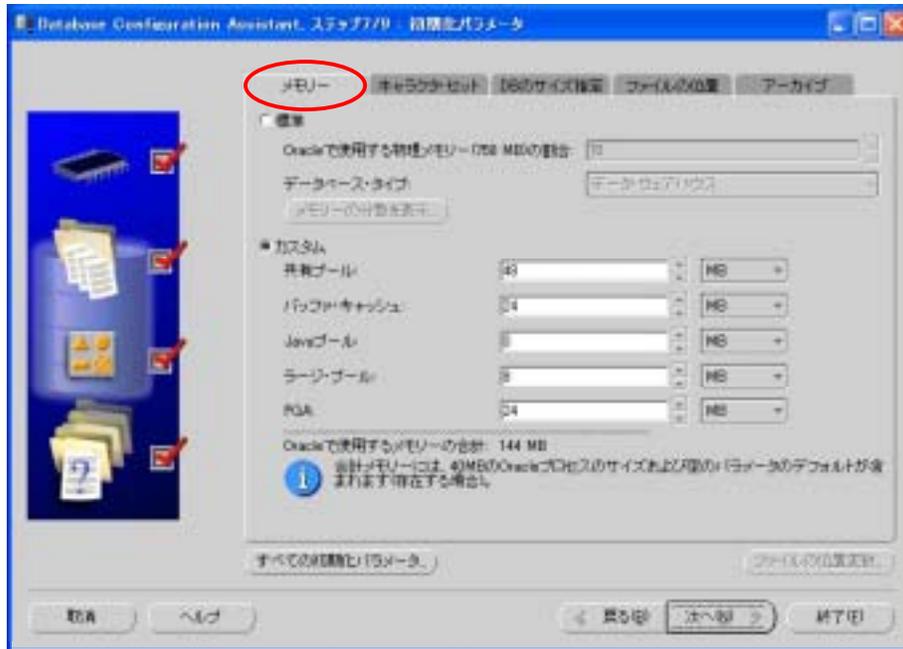


「カスタム・スクリプト」タブでは、「実行するスクリプトがありません」にチェックがついていることを確認します。

両方のタブが確認できたら、「次へ」をクリックしてください。

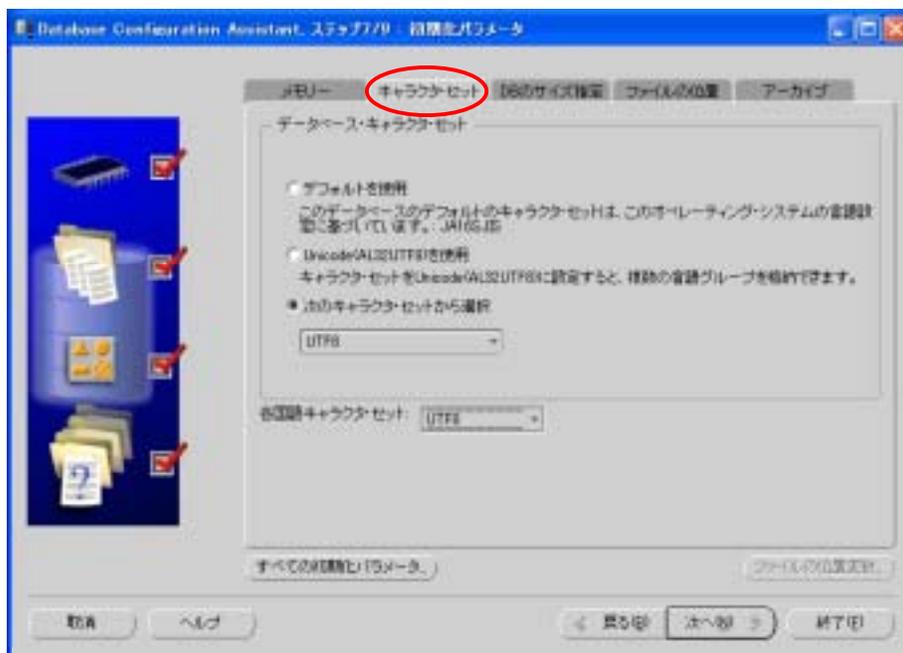


ステップ 6/9 : データベース接続オプション : 「専用サーバー・モード」をチェックし、「次へ」をクリックします。



ステップ 7/9 : 初期化パラメータ :

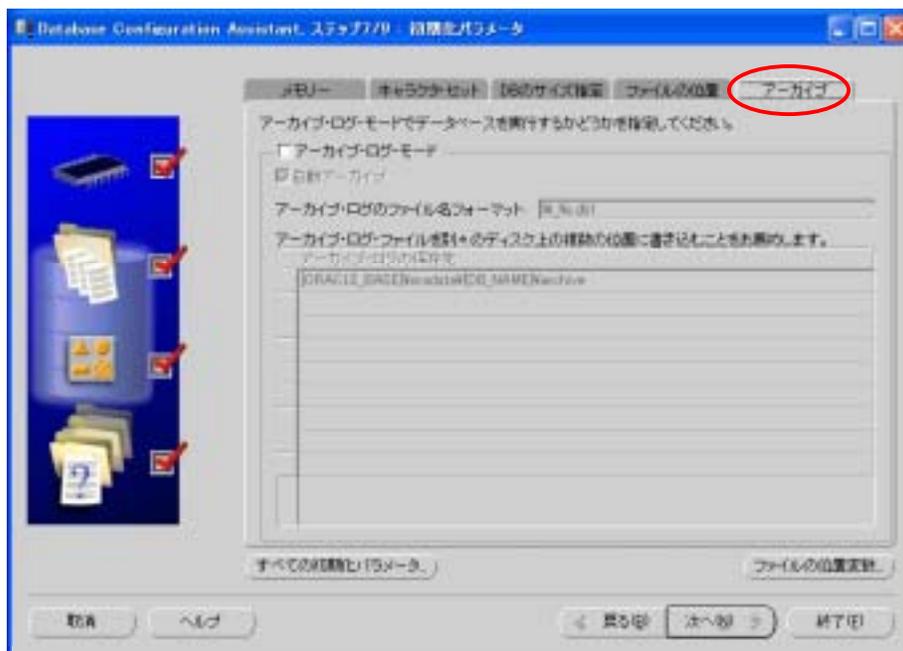
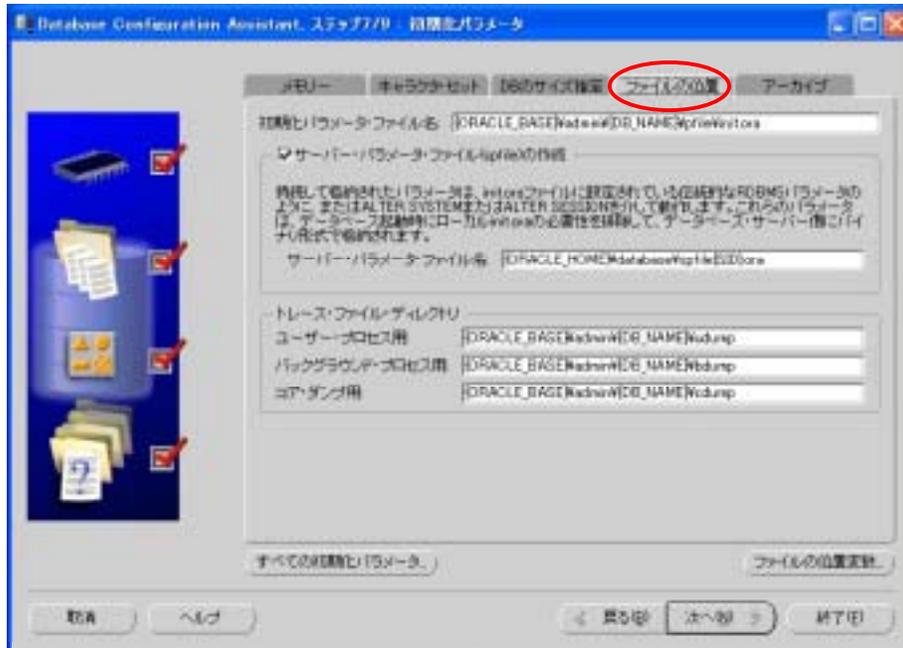
「メモリー」タブ : 各値とも特に値を変更せず、デフォルト値をそのまま使用します。



「キャラクタ・セット」タブ：「次のキャラクタ・セットから選択」で、「UTF8」を選択します。
「各国語キャラクタ・セット」には、「UTF8」を選択します。

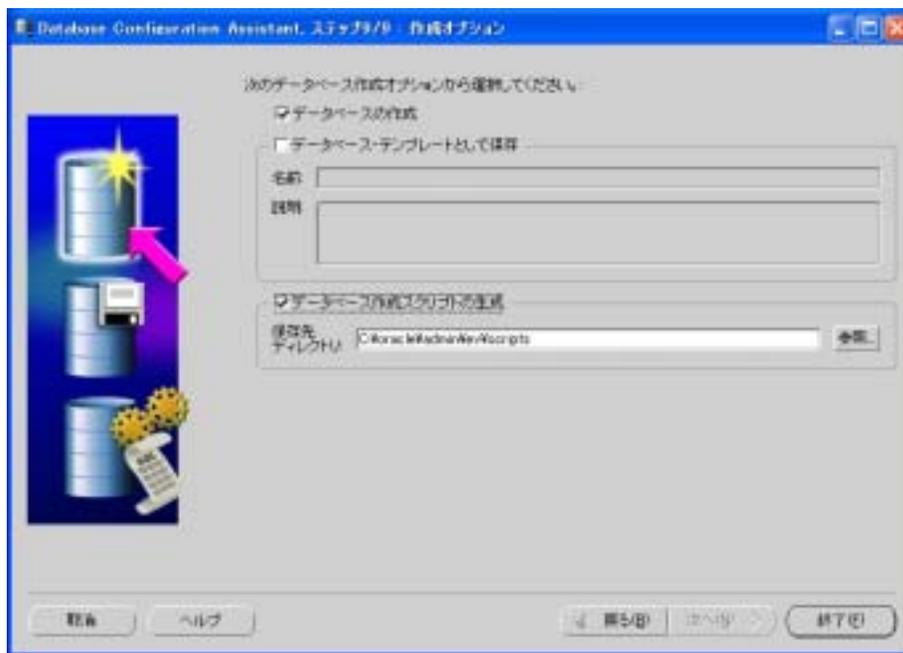
「DB のサイズ指定」「ファイルの位置」「アーカイブ」タブは特に変更せず、デフォルト値を使用します。



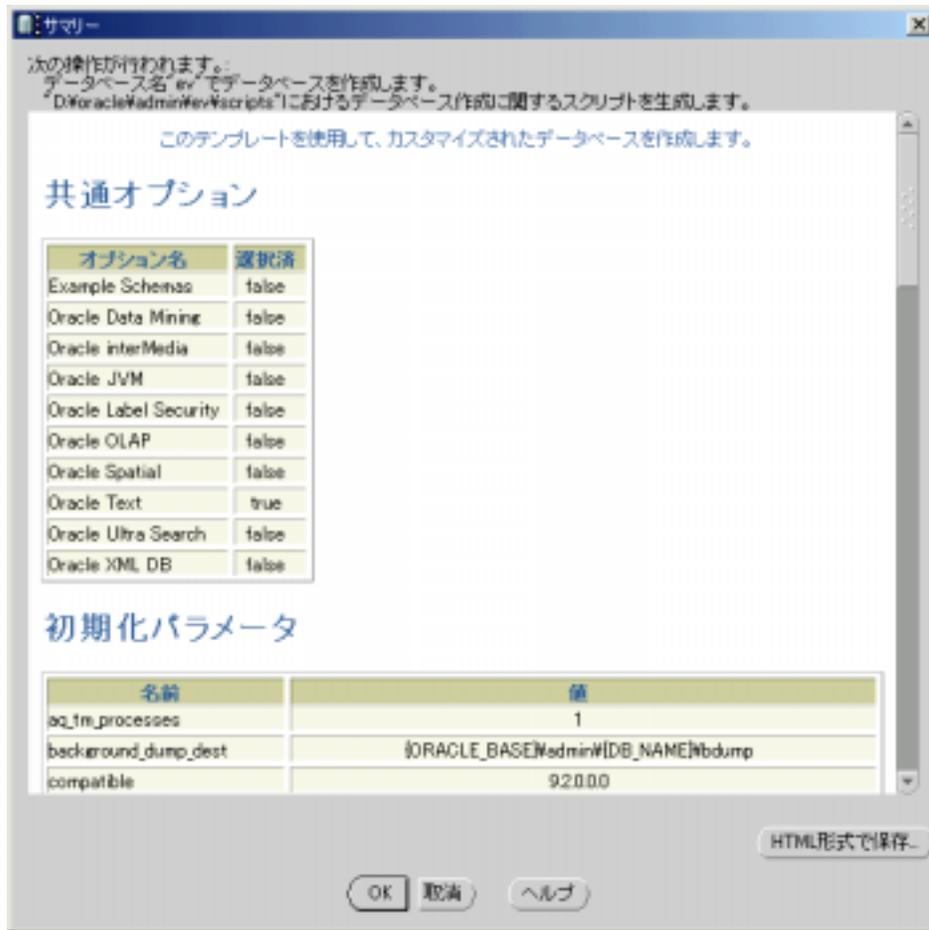




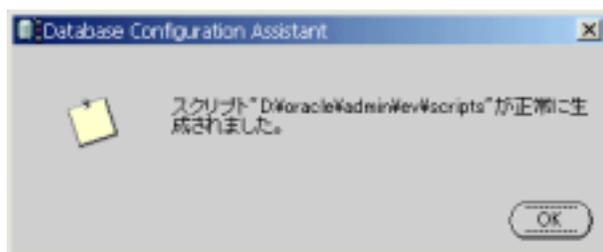
ステップ 8/9 : データベース記憶域 : 特に変更するものはありません。「次へ」をクリックします。



ステップ 9/9 : 作成オプション : 「データベースの作成」と「データベース作成スクリプトの作成」をチェックし、「終了」をクリックします。



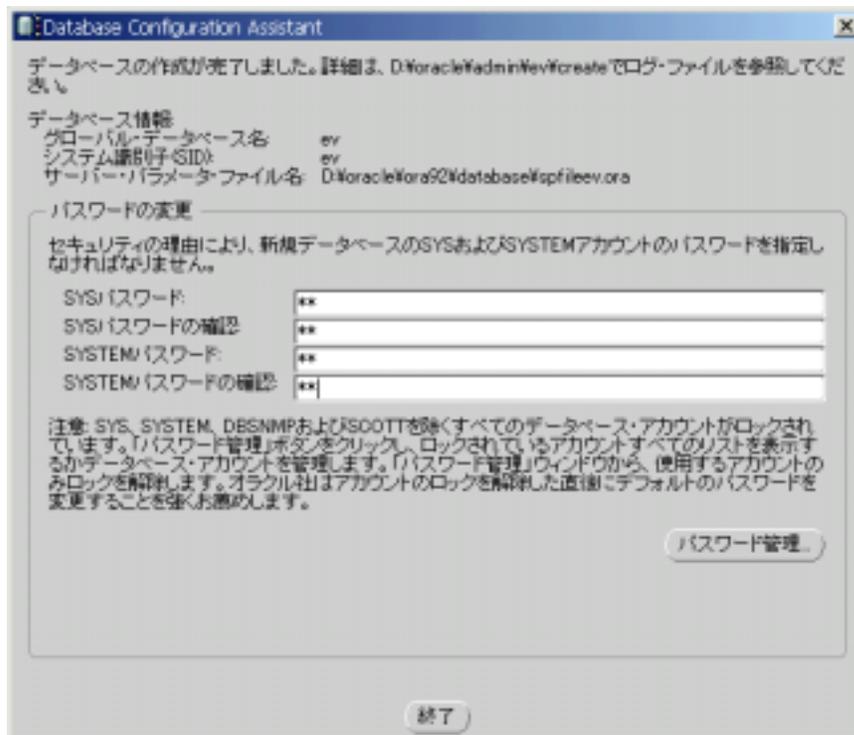
「サマリー」が表示されます。「OK」をクリックします。



すぐに、スクリプトが作成されたことを知らせるダイアログが現れます。「OK」をクリックします。



Oracle インスタンスの作成が始まります。これには時間がかかる場合があります。

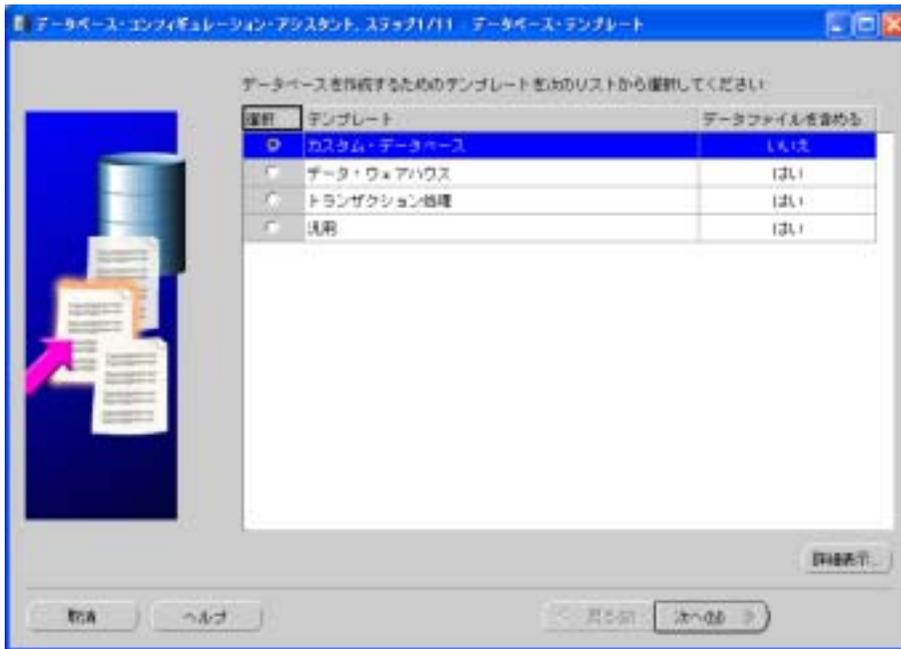


データベースの作成が完了すると、SYS および SYSTEM アカウントのパスワードを指定するダイアログが現れます。それぞれパスワードを入力し、「終了」をクリックしてください。このとき SYSTEM のパスワードとして入力した値は、後ほど「Oracle 表領域の作成」、「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」、「5. データのインポート」で使用しますので、必ず記録しておいてください。

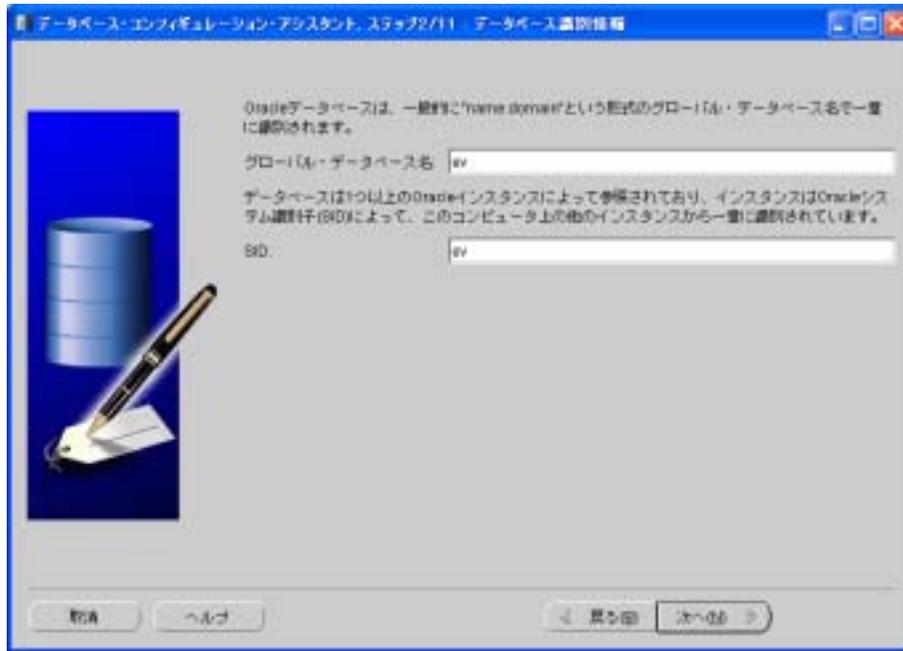
Oracle10g のデータベース作成

「Oracle Universal Installer : コンフィギュレーション・アシスタント」画面で「次へ」をクリックすると、データベース・コンフィギュレーション・アシスタントが起動します。Oracle がすでにインストールされている環境に対して ExtraView をセットアップする場合は、単独でデータベース・コンフィギュレーション・アシスタントを起動し、ここからの手順を実行します。

もし、データベース・サーバ上にすでにデータベースが構築されている場合は、別の新規データベースを作成するのではなく、ExtraView が使用するための Oracle ユーザ（スキーマ）を新規に作成してください。この場合は、「Oracle 表領域の作成」、「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」、「configuration.properties (Tomcat の設定ファイル) の設定」において既存の SID を使用することになります。Oracle ユーザ（スキーマ）の作成手順については、後述の「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」をご参照ください。

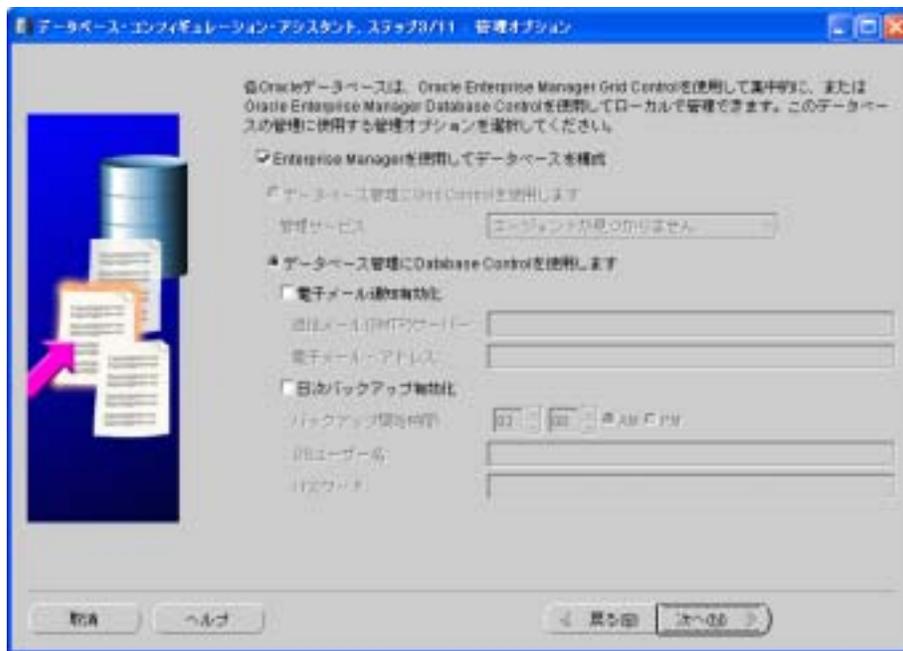


ステップ 1/11 : データベース・テンプレート : 「カスタム・データベース」を選択し、「次へ」をクリックします。

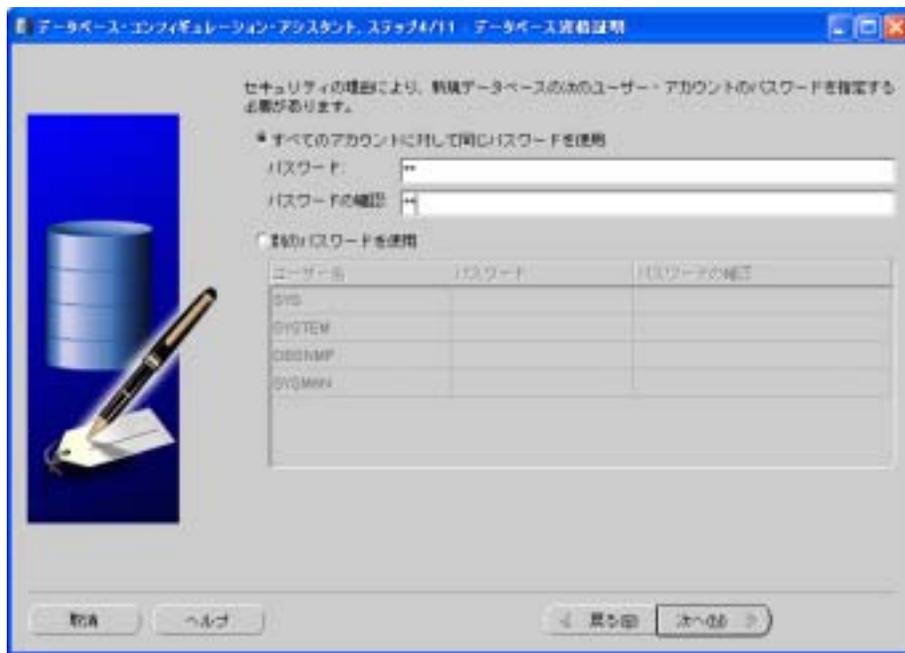


ステップ 2/11：データベース識別情報：「グローバル・データベース名」を入力し（自動的に「SID」にも同じ名が入ります）、「次へ」をクリックします。

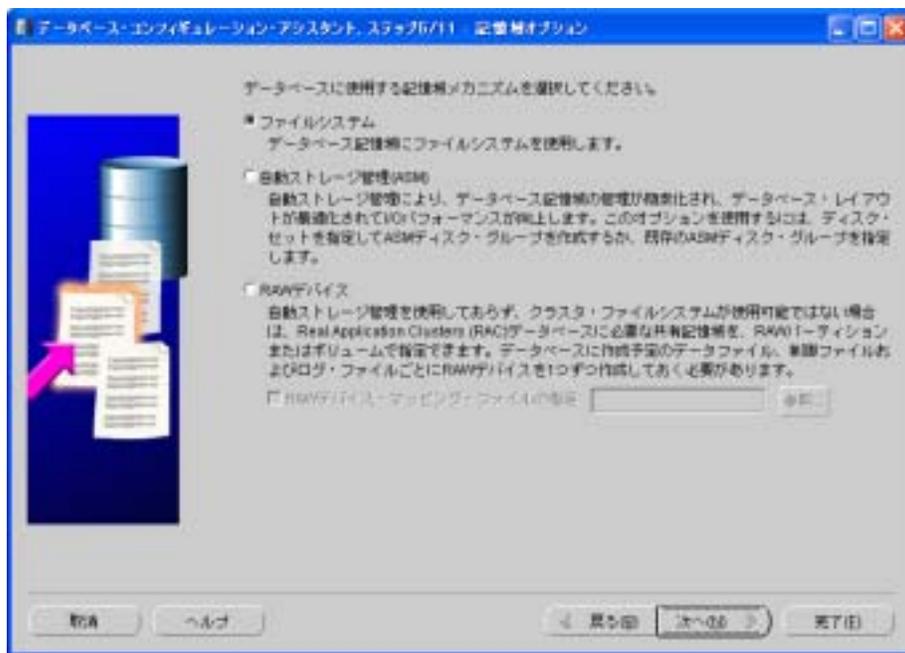
ここで入力したグローバル・データベース名（データベース識別子、すなわち SID）は、後述の「Oracle 表領域の作成」、「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」、「configuration.properties（Tomcat の設定ファイル）の設定」で使用します。忘れないよう、記録しておいてください。上の例では「ev」と入力しています。



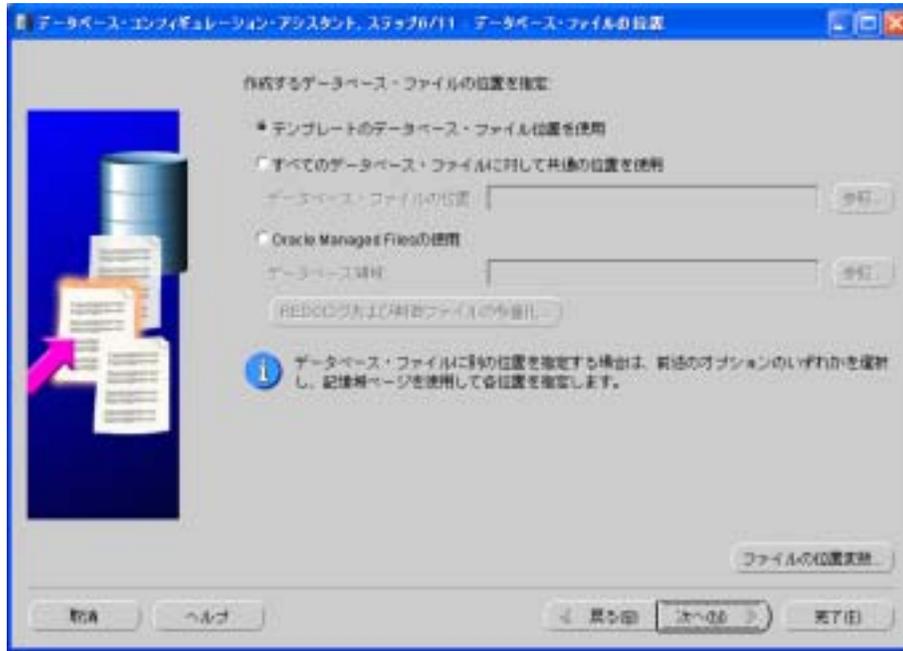
ステップ 3/11：管理オプション：各値とも特に値を変更せず、デフォルト値をそのまま使用します。



ステップ 4/11：データベース資格証明：「すべてのアカウントに対して同じパスワードを使用」を選択し、パスワードを入力します。「別のパスワードを使用」を選択して、各アカウントに異なるパスワードを設定することも可能です。



ステップ 5/11：記憶域オプション：「ファイルシステム」を選択します。



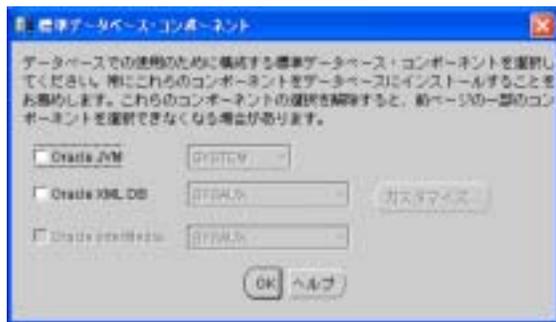
ステップ 6/11：データベース・ファイルの位置：ファイル位置を変更する必要がなければ、デフォルト値をそのまま使用します。



ステップ 7/11：リカバリ構成：特に変更せず、デフォルト値をそのまま使用します。



ステップ 8/11：データベース・コンテンツ：「データベース・コンポーネント」タブの、「標準データベース・コンポーネント」をクリックします。

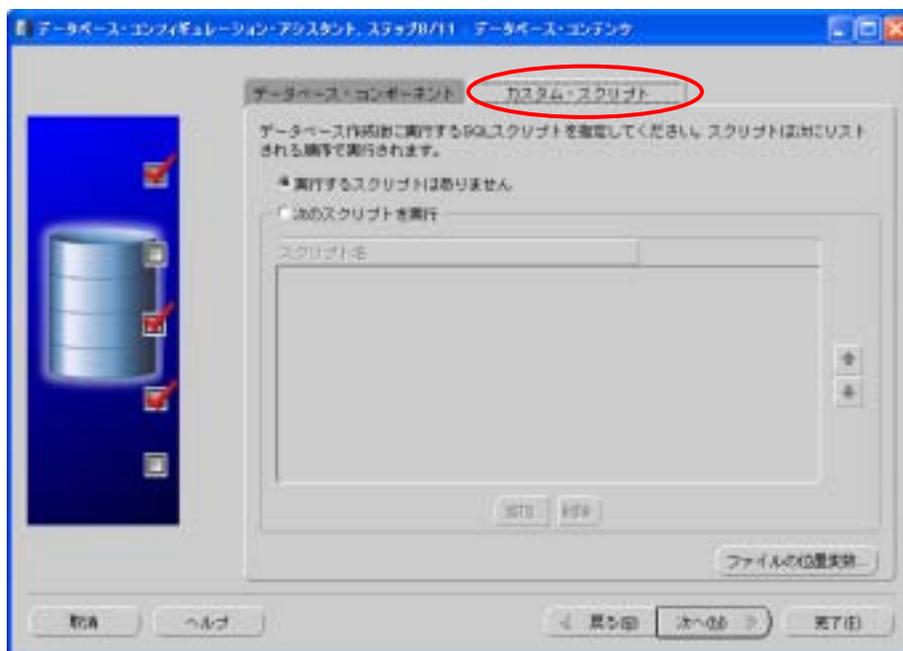


全てのオプションのチェックを外してください。

オプションのチェックを外す際に、「表領域も削除しますか」というダイアログが現れるオプションがあります。そのようなダイアログが表示された場合は、「はい」を選択してください。

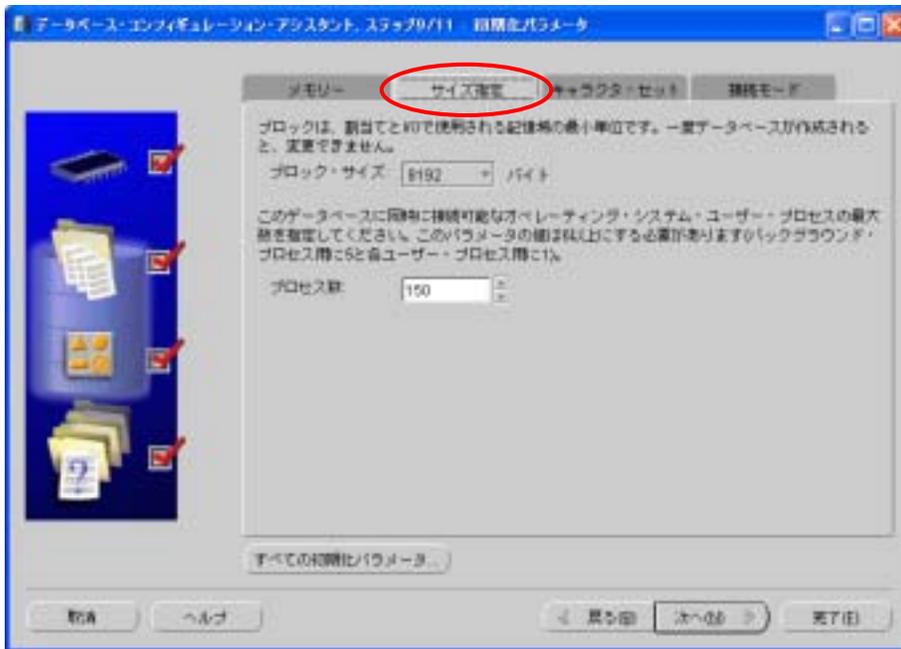
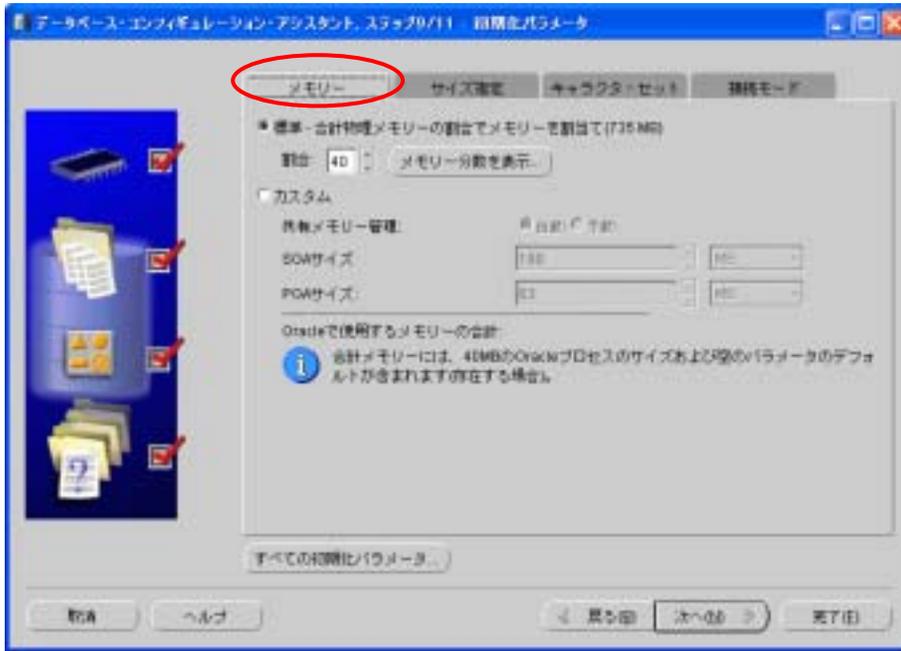


「データベース・コンポーネント」タブでは、「Enterprise Manager リポジトリ」のみチェックし、その他のオプションはチェックを外してください。



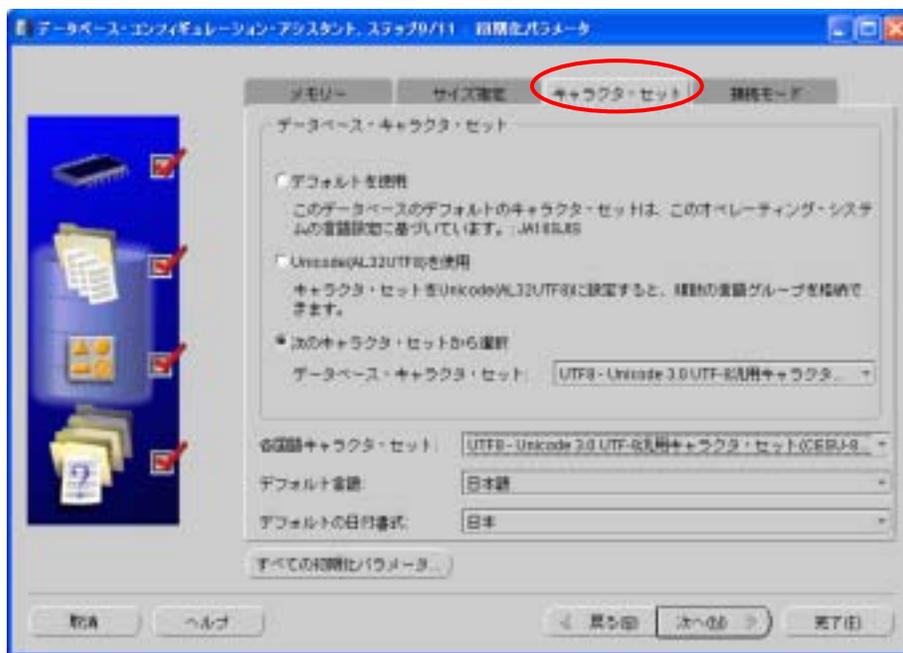
「カスタム・スクリプト」タブでは、「実行するスクリプトがありません」にチェックがついていることを確認します。

両方のタブが確認できたら、「次へ」をクリックしてください。



ステップ 9/11：初期化パラメータ：

「メモリ」「サイズ指定」タブは特に値を変更せず、デフォルト値を使用します。



「キャラクタ・セット」タブ：「次のキャラクタ・セットから選択」で、「UTF8 Unicode 3.0 UTF-8 汎用キャラクタ・セット」を選択します。「各国語キャラクタ・セット」には、「UTF8 Unicode 3.0 UTF-8 汎用キャラクタ・セット」を選択します。

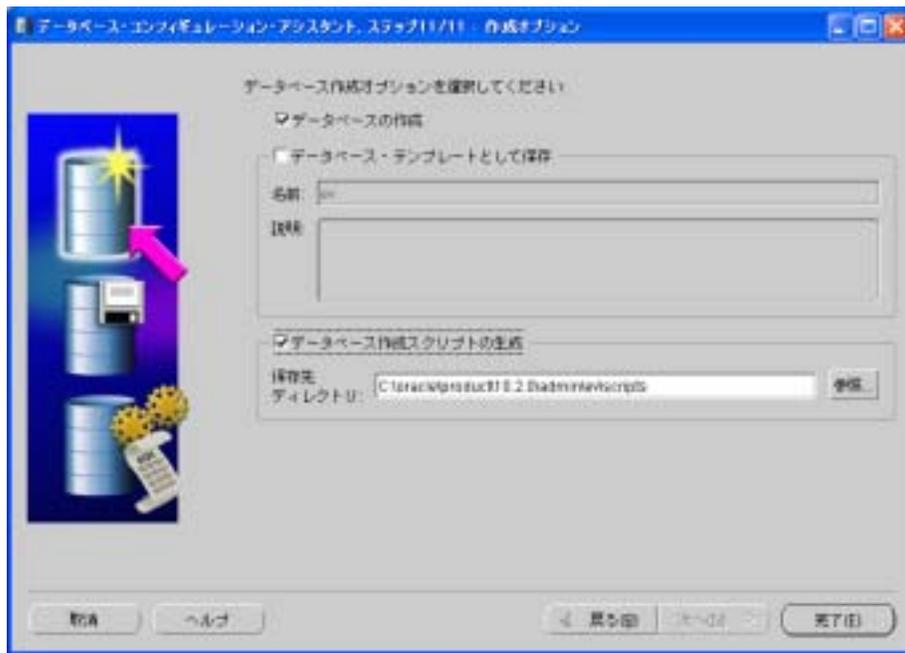


「接続モード」タブ：「専用サーバー・モード」をチェックします。

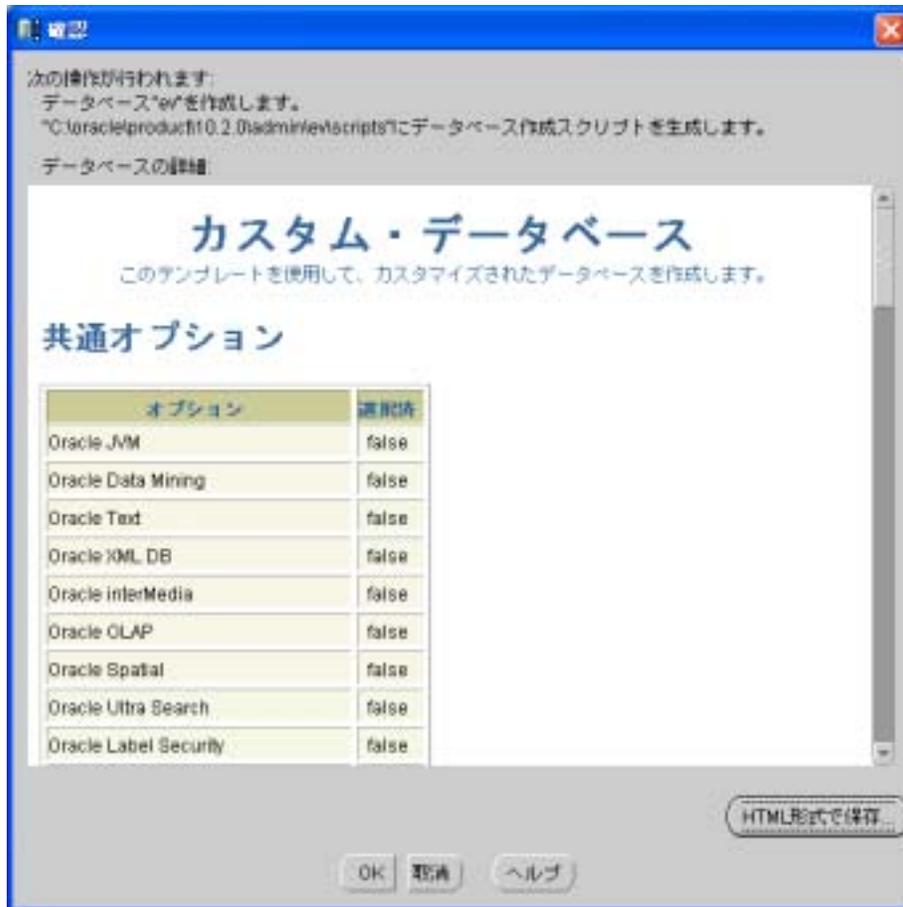
すべてのタブが確認できたら、「次へ」をクリックしてください。



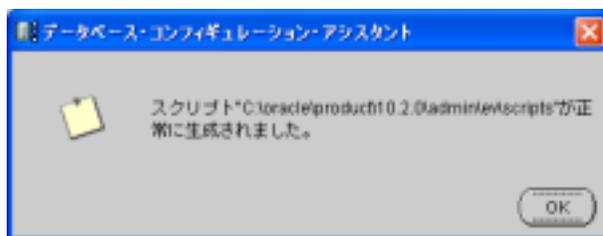
ステップ 10/11 : データベース記憶域 : 特に変更するものはありません。「次へ」をクリックします。



ステップ 11/11 : 作成オプション : 「データベースの作成」と「データベース作成スクリプトの生成」をチェックし、「完了」をクリックします。



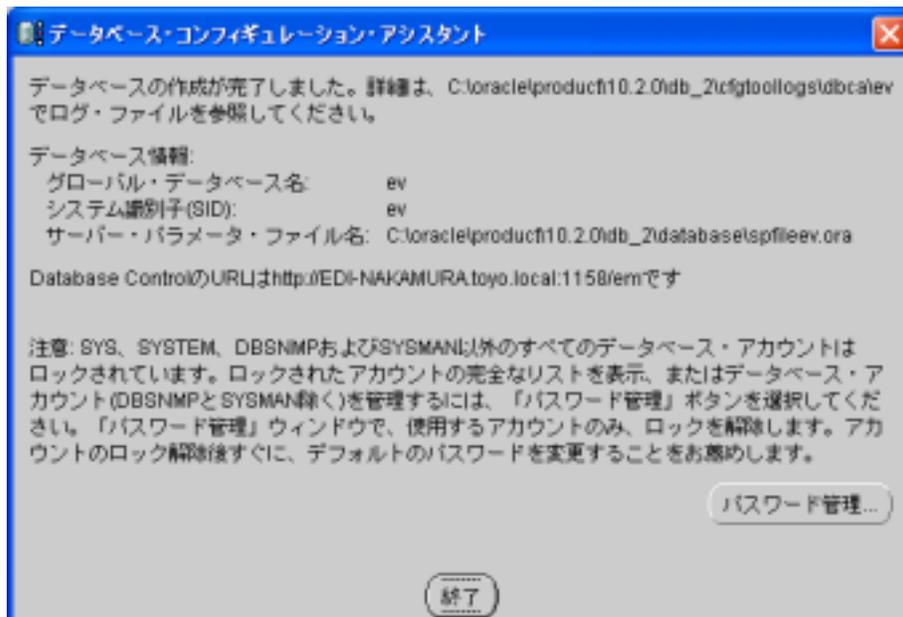
「確認」が表示されます。「OK」をクリックします。



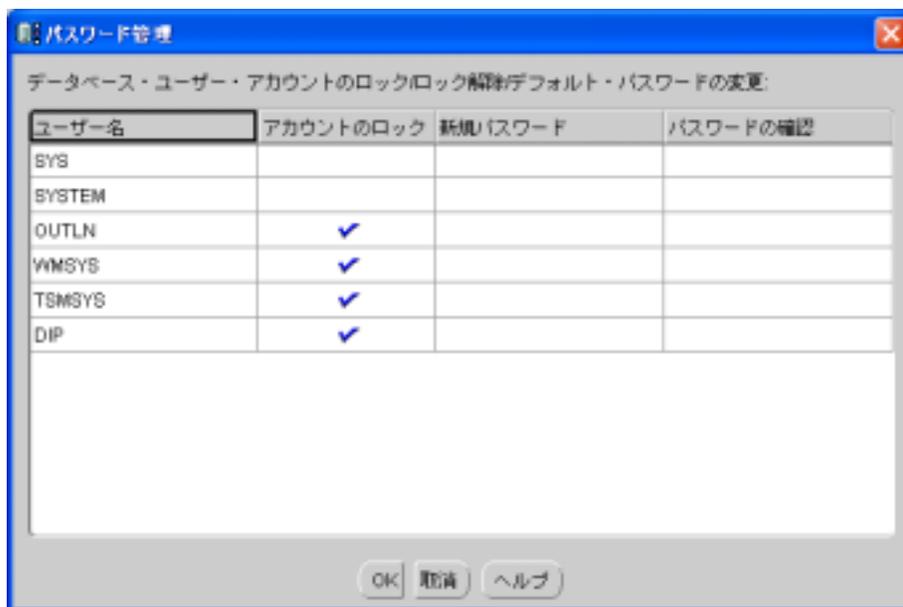
すぐに、スクリプトが作成されたことを知らせるダイアログが現れます。「OK」をクリックします。



Oracle インスタンスの作成が始まります。これには時間がかかる場合があります。



データベースの作成が完了したことを知らせるダイアログが表示されます。「パスワード管理」をクリックします。

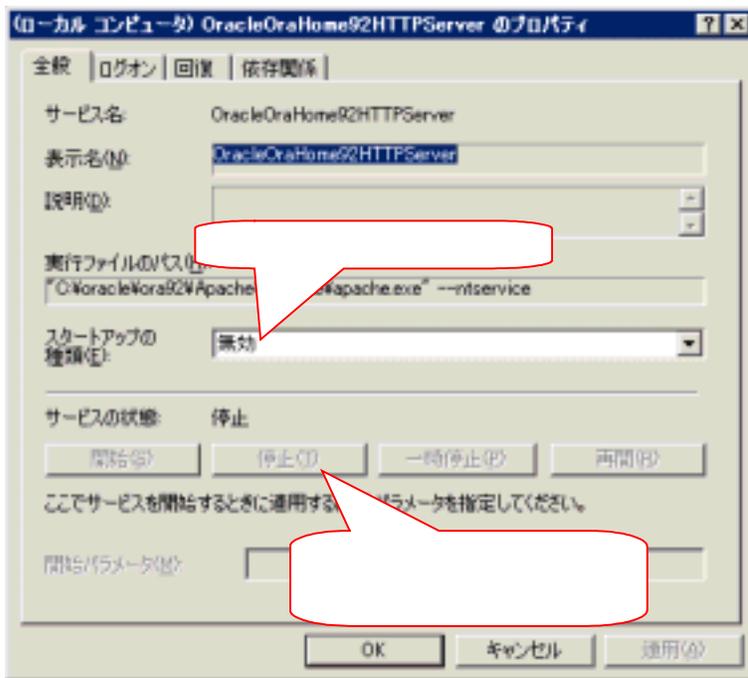
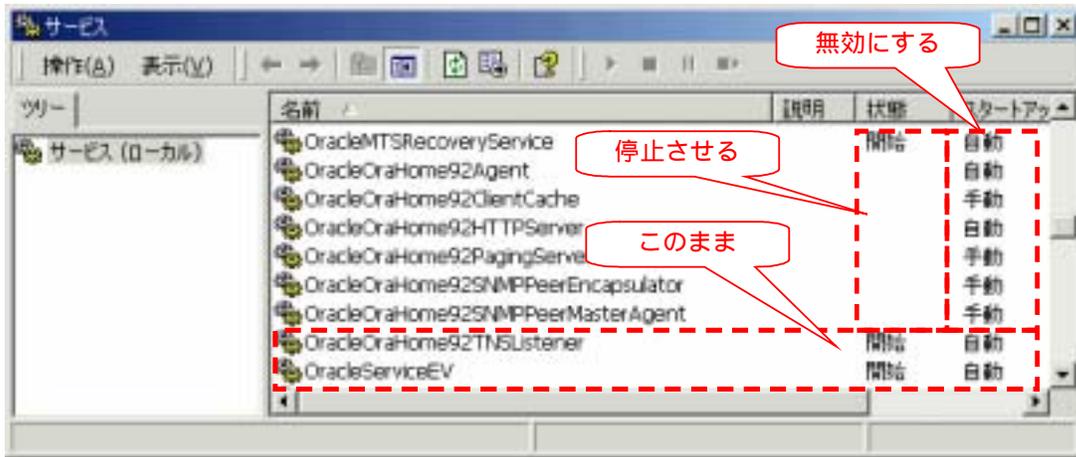


SYS および SYSTEM アカウントのパスワードを指定するダイアログが現れます。それぞれパスワードを入力し、「OK」をクリックしてください。このとき SYSTEM のパスワードとして入力した値は、後ほど「Oracle 表領域の作成」、「Oracle ユーザ (スキーマ) の作成」、「5. データのインポート」で使用しますので、必ず記録しておいてください。

不要なサービスの停止

Database Configuration Assistant 終了後、ExtraView にとって不要な Oracle のサービスを停止します。

サービスの管理画面から、「OracleOraHome92TNSListener」及び「OracleServiceEV」(OraHome92 および EV の部分は実際の入力内容に置き換えてください) **を除く**サービスを全て停止し、無効化してください。Oracle HTTP Server(Apache.exe)はサービスを停止しても起動していますが、OS の再起動で立ち上がらなくなります。インストール後に OracleHome92HTTPServer(apache.exe)のコマンドプロンプト画面が上がったままになっている場合もありますが、強制終了していただいて構いません。



Oracle 表領域の作成

C:\%ExtraView_instal\%DataBase にある次のファイルを、C:\%ExtraView%\database にコピーします。

- createEvTs.sql

この SQL スクリプトを実行して、Oracle の表領域を作成します。この領域に実際の issue データ（添付ファイルも含む）が格納されますので、あらかじめ十分な空き領域が必要です。一般的なサイズの計算方法については、「ExtraView インストール / 構成ガイド」をご参照ください。

実行手順：

1. コマンドプロンプトを開き、SQL スクリプトのあるディレクトリへ移動します。

```
cd C:¥ExtraView¥database
```

2. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus system/<パスワード>@<SID> @createEvTs
```

@createEvTs と指定することにより、SQL スクリプト createEvTs.sql を実行することができます。実行例を以下に示します。

コマンドプロンプト	
C:¥ExtraView¥database>dir	
ドライブ c のボリューム ラベルがありません。 ボリューム シリアル番号は B061-150F です	
C:¥ExtraView¥database のディレクトリ	
2006/03/13	20:04 <DIR> .
2006/03/13	20:04 <DIR> ..
2006/12/20	11:34 17,291,264 best_data.dmp
2005/04/18	16:06 669 createEvTs.sql
2005/01/26	17:16 213 createExtraView.sql
2005/10/03	14:59 1,331 Japanese_Application_defaults.sql
	4 個のファイル 8,284,325 バイト
	2 個のディレクトリ 15,829,614,592 バイトの空き領域
C:¥ExtraView¥database>sqlplus system/systempw@ev @createEvTs	

ここでの <パスワード> は、Oracle データベースの system アカウントに対するパスワードです。この Oracle データベースが「新規データベースの作成」において新規作成されたものであれば、その際に設定したパスワードをここで指定します。既存データベースの場合、具体的な <パスワード> が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、system アカウントのパスワードを systempw としています。

<SID> の部分も、「新規データベースの作成」で設定した SID に置き換えます。既存データベースの場合、具体的な SID が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、SID を ev としています。

コマンドプロンプト

```
C:¥ExtraView¥database>sqlplus system/systempw@ev @createEvTS

SQL*Plus: Release 9.2.0.1.0 - Production on月Jun 13 11:18:19 2005

Copyright (c) 1982, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Oracle9i Standard Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Production
に接続されました。
extraviewstslocationに値を入力してください: C:¥ExtraView¥database
旧 3: DATAFILE '&extraviewTsLocation/extraview01.dbf' SIZE 150M
新 3: DATAFILE 'C:¥ExtraView¥Oracle¥data/extraview01.dbf' SIZE 150M

表領域が作成されました。

extraviewstslocationに値を入力してください: C:¥ExtraView¥database
旧 3: DATAFILE '&extraviewTsLocation/extraview_idx01.dbf' SIZE 100M
新 3: DATAFILE 'C:¥ExtraView¥Oracle¥data/extraview_idx01.dbf' SIZE 100M

表領域が作成されました。

extraviewstslocationに値を入力してください: C:¥ExtraView¥database
旧 3: DATAFILE '&extraviewTsLocation/extraview_session01.dbf' SIZE 30M
新 3: DATAFILE 'C:¥ExtraView¥Oracle¥data/extraview_session01.dbf' SIZE
30M

表領域が作成されました。

extraviewstslocationに値を入力してください: C:¥ExtraView¥database
旧 3: DATAFILE '&extraviewTsLocation/extraview_lob01.dbf' SIZE 150M
新 3: DATAFILE 'C:¥ExtraView¥Oracle¥data/extraview_lob01.dbf' SIZE 150M

表領域が作成されました。

Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Productionとの接続が切断されました。
```

実行すると、表領域を作成するディレクトリの入力を促されますので、あらかじめ決めたディレクトリ・パス（ここではC:¥ExtraView¥database）を入力します。

表領域は4つありますので、ディレクトリ・パスの指定は4回行います。4回とも同じディレクトリ・パスを指定します。

正常終了した場合、最後に「表領域が作成されました」というメッセージが表示されます。

Oracle ユーザ (スキーマ) の作成

次のファイルを、C:\%ExtraView%\database にコピーします。

- Oracle9i の場合 C:\%ExtraView%\install\%DataBase%\Oracle9i\createExtraView.sql
- Oracle10g の場合 C:\%ExtraView%\install\%DataBase%\Oracle10g\createExtraView.sql

この SQL スクリプトを実行して、Oracle のユーザ (スキーマ) を作成します。

実行手順：

1. コマンドプロンプトを開き、SQL スクリプトのあるディレクトリへ移動します。

```
cd C:\%ExtraView%\database
```

2. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus system/<パスワード>@<SID> @createExtraView
```

@createExtraView と指定することにより、SQL スクリプト createExtraView.sql を実行することができます。実行例を以下に示します。

```
コマンドプロンプト
C:\%ExtraView%\database>dir
ドライブ c のボリューム ラベルがありません。
ボリューム シリアル番号は B061-150F です

C:\%ExtraView%\database のディレクトリ

2006/03/13  20:04    <DIR>          .
2006/03/13  20:04    <DIR>          ..
2006/12/20  11:34             17,291,264 best_data.dmp
2005/04/18  16:06              669 createEvTS.sql
2005/01/26  17:16              213 createExtraView.sql
2005/10/03  14:59             1,331 Japanese_Application_defaults.sql
              4 個のファイル              8,284,325 バイト
              2 個のディレクトリ  15,829,614,592 バイトの空き領域

C:\%ExtraView%\database>sqlplus system/systempw@ev @createExtraView
```

ここでの <パスワード> は、Oracle データベースの system アカウントに対するパスワードです。この Oracle データベースが「新規データベースの作成」において新規作成されたものであれば、その際に設定したパスワードをここで指定します。既存データベースの場合、具体的な <パスワード> が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、system アカウントのパスワードを systempw としています。

<SID> の部分も、「新規データベースの作成」で設定した SID に置き換えます。既存データベースの場合、具体的な SID が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、SID を ev としています。

実行すると、Oracle のユーザ・アカウント extraview (system アカウントとは異なりますのでご注意ください) に対するパスワード の入力を促されます。自分で決めたパスワードを入力して

ください。なお、ここで入力したユーザ・アカウント extraview のパスワードは、後述の「 configuration.properties (Tomcat の 設 定 フ ェ イ ル) の 設 定 」 において、 configuration.properties ファイルの中での DB_PASSWORD の設定値になります。忘れないよう、記録しておいてください。

以下の実行例では、ユーザ・アカウント extraview に対して、パスワードとして extraviewpw を設定しています。

```
コマンドプロンプト
C:\¥ExtraView¥database>sqlplus system/systempw@ev @createExtraView

SQL*Plus: Release 9.2.0.1.0 - Production on 水 Apr 13 16:56:36 2005

Copyright (c) 1982, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Production
に接続されました。
passwordに値を入力してください: extraviewpw
旧 2: IDENTIFIED BY &&PASSWORD
新 2: IDENTIFIED BY extraviewpw

ユーザーが作成されました。

権限付与が成功しました。

権限付与が成功しました。

Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Productionとの接続が切断されました。
```

4. ExtraView ソフトウェアのセットアップ

ExtraView 本体のセットアップ

ExtraView 本体のバイナリをセットアップします。この手順については、「ExtraView インストール / 構成ガイド」にも説明が記載されています。

実行手順：

1. C:\ExtraView_install\ExtraViewSW の下にある evj ディレクトリを、C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps 直下にコピーします。



注) このディレクトリ名 evj は、Oracle のデータベース識別子 ev と混同し易いのでご注意ください。これらはまったく別の情報であり、同じ名前でも構いませんし、異なる名前でも構いません。

もし、一つのデータベース識別子に対して複数の ExtraView 環境を構築したい場合、すなわち webapps ディレクトリ配下に複数の ExtraView インスタンスを作成したい場合には、東陽テクニカのテクニカル・サポート (ss_support@toyo.co.jp) までご連絡ください。

httpd.conf (Apache の設定ファイル) の設定

Apache を C:\ExtraView\Apache2 にインストールしたとすると、このファイルは C:\ExtraView\Apache2\conf ディレクトリ直下に存在します。

このファイルの設定方法については、「ExtraView インストール / 構成ガイド」に詳しく記載されています。「Windows オペレーティング・システムへのサポート・ソフトウェアのインストール」の「Apache のインストール」の項をご参照ください。

設定例を以下に示します。

```
httpd.conf - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)

#LoadModule mime_magic_module modules/mod_mime_magic.so
#LoadModule proxy_module modules/mod_proxy.so
#LoadModule proxy_connect_module modules/mod_proxy_connect.so
#LoadModule proxy_http_module modules/mod_proxy_http.so
#LoadModule proxy_ftp_module modules/mod_proxy_ftp.so
LoadModule negotiation_module modules/mod_negotiation.so
#LoadModule rewrite_module modules/mod_rewrite.so
LoadModule setenvif_module modules/mod_setenvif.so
#LoadModule spelling_module modules/mod_spelling.so
#LoadModule status_module modules/mod_status.so
#LoadModule unique_id_module modules/mod_unique_id.so
LoadModule userdir_module modules/mod_userdir.so
#LoadModule usertrack_module modules/mod_usertrack.so
#LoadModule vhost_alias_module modules/mod_vhost_alias.so
#LoadModule ssl_module modules/mod_ssl.so
LoadModule jk_module modules/mod_jk-2.0.43.dll

#
# ExtendedStatus controls whether Apache will generate "full" status
# information (ExtendedStatus On) or just basic information (ExtendedStatus
# Off) when the "server-status" handler is called. The default is Off.
#
#ExtendedStatus On

### Section 2: 'Main' server configuration
#
# The directives in this section set up the values used by the 'main'
# server, which responds to any requests that aren't handled by a
```

```
httpd.conf - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)

# configuration.
#
# Use name-based virtual hosting.
#
#NameVirtualHost *
#
# VirtualHost example:
# Almost any Apache directive may go into a VirtualHost container.
# The first VirtualHost section is used for requests without a known
# server name.
#
#<VirtualHost *>
#   ServerAdmin webmaster@dummy-host.example.com
#   DocumentRoot /www/docs/dummy-host.example.com
#   ServerName dummy-host.example.com
#   ErrorLog logs/dummy-host.example.com-error_log
#   CustomLog logs/dummy-host.example.com-access_log common
#</VirtualHost>

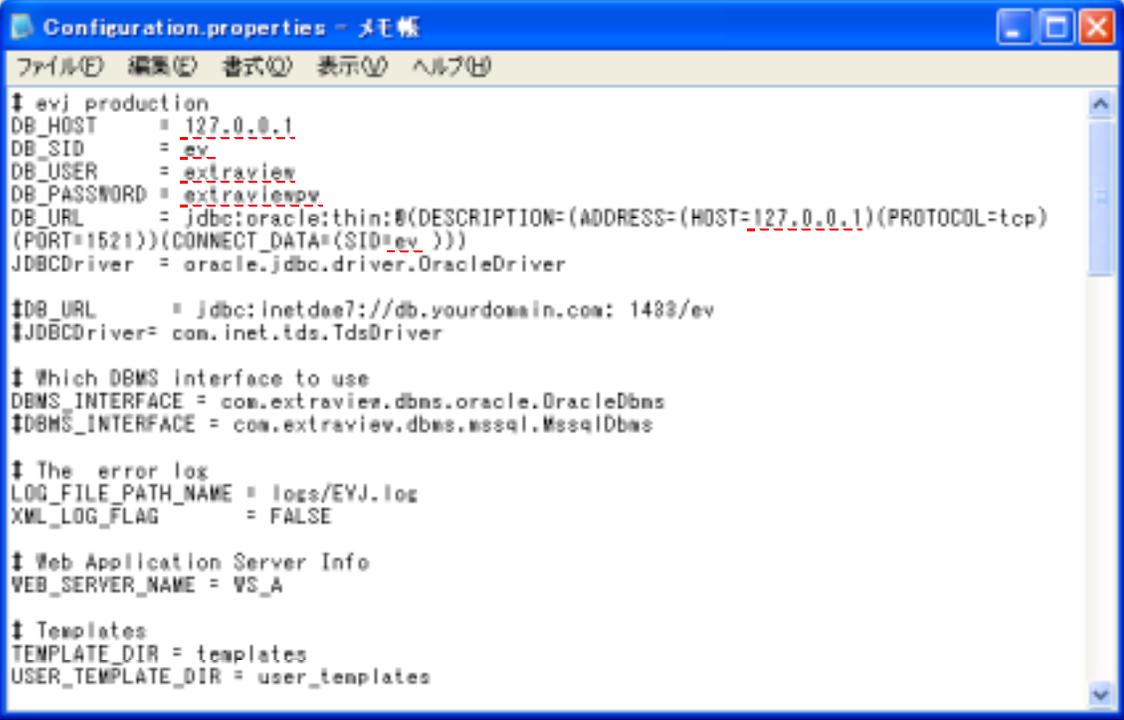
JkWorkersFile C:/ExtraView/Apache2/conf/workers.properties

Alias /evj/ "C:/ExtraView/Tomcat5.0/webapps/evj/"
JkMount /evj/ExtraView/* ajp13
JkMount /evj/ExtraView ajp13
JkMount /evj/images/CompanyLogo.gif ajp13
```

configuration.properties (Tomcat の設定ファイル) の設定

このファイルは、C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\configuration 直下に存在します。このファイルの設定方法については、「ExtraView インストール/構成ガイド」に詳しく記載されています。「Windows オペレーティング・システムへのサポート・ソフトウェアのインストール」の「Apache のインストール」の項をご参照ください。

設定例を以下に示します。



```
Configuration.properties - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
$ evj production
DB_HOST      = 127.0.0.1
DB_SID       = ev
DB_USER      = extraview
DB_PASSWORD  = extraviewpw
DB_URL       = jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(HOST=127.0.0.1)(PROTOCOL=tcp)
(PORT=1521))(CONNECT_DATA=(SID=ev)))
JDBCDriver   = oracle.jdbc.driver.OracleDriver

$DB_URL      = jdbc:inetds://db.yourdomain.com: 1433/ev
$JDBCdriver=  com.inet.tds.TdsDriver

$ Which DBMS interface to use
DBMS_INTERFACE = com.extraview.dbms.oracle.OracleDbms
$DBMS_INTERFACE = com.extraview.dbms.mssql.MssqlDbms

$ The error log
LOG_FILE_PATH_NAME = logs/EYJ.log
XML_LOG_FLAG      = FALSE

$ Web Application Server Info
WEB_SERVER_NAME = VS_A

$ Templates
TEMPLATE_DIR = templates
USER_TEMPLATE_DIR = user_templates
```

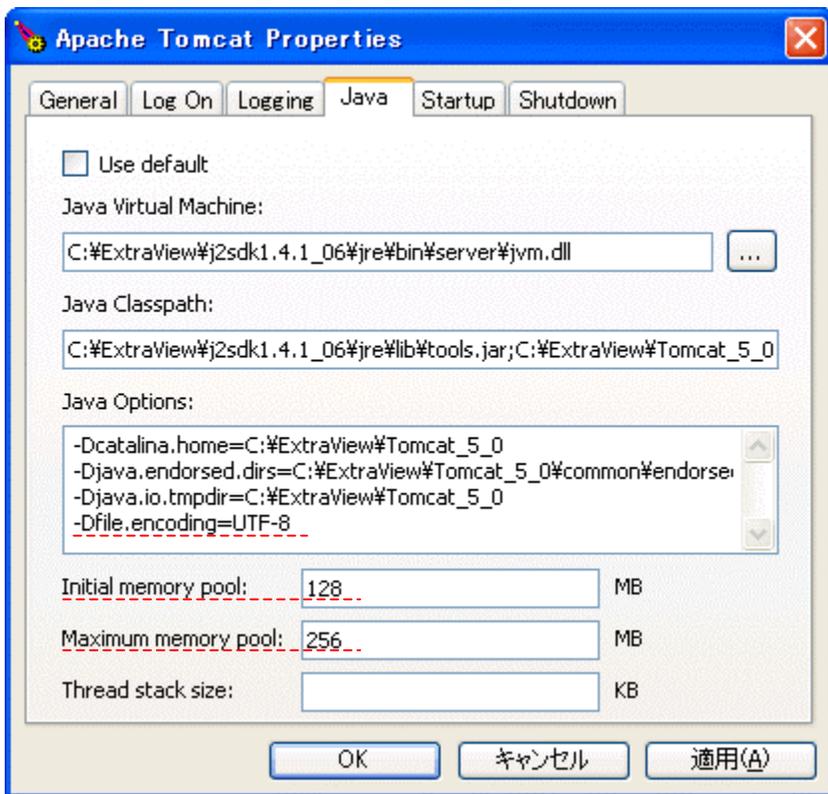
- DB_HOST : データベース・サーバの名前、もしくは IP アドレスです。
- DB_SID : 「新規データベースの作成」で設定したデータベース識別子 (ここでは ev) です。
- DB_USER : 「Oracle ユーザ (スキーマ) の作成」で作成したデータベース・ユーザの名前 (ここでは extraview) です。
- DB_PASSWORD : 「Oracle ユーザ (スキーマ) の作成」で入力した DB_USER のパスワード (ここでは extraviewpw) です。
- HOST : DB_HOST と同じです。
- SID : DB_SID と同じです。

Tomcat の起動パラメータ設定

「ExtraView インストール/構成ガイド」では、`catalina.bat` を編集することによって、Tomcat 起動時のパラメータを設定する手順を説明しています。Tomcat 5.0 では、この設定を行うための GUI が用意されており、これを実行することによってより簡単にパラメータを設定することができます。

実行手順：

1. [スタート] > [プログラム] > [Apache Tomcat 5.0] > [Configure Tomcat] を実行します。
2. Apache Tomcat Properties が起動しますので、Java タブを開きます。
3. Initial memory pool に 128 (MB)、Maximum memory pool に 256 (MB) を設定します。
(「ExtraView インストール/構成ガイド」では、`-Xms96m -Xmx512m` という記述になっていますが、それぞれ 128、256 と設定することをお勧めします。)
4. Java Options の最後の行に、`-Dfile.encoding=UTF-8` という記述を追加します。
5. OK をクリックします。



BatchMail のセットアップ

ExtraView から電子メールの送信を行うようにするには、BatchMail プログラムをセットアップします。BatchMail をセットアップすることによって、issue の追加、更新を行った際、特定のユーザに対して自動的に電子メールを送信することができますようになります。

BatchMail の具体的なセットアップ手順については、「ExtraView インストール/構成ガイド」をご参照ください。

5. データのインポート

best_data のインポート

C:\¥ExtraView_install¥DataBase にある次のファイルを、C:\¥ExtraView¥database にコピーします。

- best_data.dmp (ExtraView のバージョンによってファイル名は異なる可能性があります、拡張子は必ず .dmp です。)

このファイルを使用して、ExtraView 社が提供する best_data をインポートすることができます。この操作は、オプションです。

best_data とは、「不具合」、「ネットワークへの要求」、「資産」などのビジネスエリアをはじめ、ユーザや各種リストなどのメタデータを事前に構築するための情報ファイルです。これを用いることにより、ゼロの状態からの構築よりも簡単に、ExtraView 環境を構築することができます。

実行手順：

1. コマンドプロンプトを開き、使用する dmp ファイルのあるディレクトリへ移動します。

```
cd C:\¥ExtraView¥database
```

2. 次のコマンドを実行します。

```
imp system/<パスワード>@<SID> file=best_data.dmp fromuser=best_data  
touser=extraview commit=y
```

(コマンドが長いので 2 行になっていますが、実際は 1 つのコマンドです。)

ここでの <パスワード> は、Oracle データベースの system アカウントに対するパスワードです。この Oracle データベースが「新規データベースの作成」において新規作成されたものであれば、その際に設定したパスワードをここで指定します。既存データベースの場合、具体的な <パスワード> が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、system アカウントのパスワードを systempw としています。

<SID> の部分も、「新規データベースの作成」で設定した SID に置き換えます。既存データベースの場合、具体的な SID が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、SID を ev としています。

コマンドプロンプト

```
C:\¥ExtraView¥database>imp system/systempw@ev file=best_data.dmp
fromuser=best_data touser=extraview commit=y
```

```
Import: Release 9.2.0.1.0 - Production on 水 May 31 18:17:04 2006
```

```
Copyright (c) 1982, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.
```

```
接続先: Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Production
```

エクスポート・ファイルはEXPORT:V09.02.00によってダイレクト・パス経由で作成されました
JA16SJISキャラクタ・セットおよびUTF8 NCHARキャラクタ・セットでインポートが完了しました
インポート・サーバーではUTF8キャラクタ・セットを使用します(キャラクタ・セットの変換可能)。
エクスポート・クライアントではUTF8キャラクタ・セットを使用しません(キャラクタ・セットの変換可能)。

```
. LANGUAGEMASTERのオブジェクトをEXTRAVIEWにインポートしています
. . 表      "ALLOWED_FUNCTIONS"をインポートしています      577行インポートされました。
. . 表      "ALLOWED_LOCALE"をインポートしています        2行インポートされました。
. . 表      "ALLOWED_VALUES"をインポートしています        0行インポートされました。
. . 表      "ALLOWED_VALUE_TYPE"をインポートしています    0行インポートされました。
. . 表      "APPLICATION_DEFAULT"をインポートしています    206行インポートされました。
```

```
...
...
...
```

```
Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Productionとの接続が切断されました。
```

実行すると、いくつかの「xxxx をインポートしています」というメッセージが、コマンドプロンプトに出力されます。

正常終了した場合、最後に「インポートは警告なしで正常終了しました。」というメッセージが表示されます。

6. その他の設定

ExtraView ライセンスの設定

次のファイルを使用します。このファイルは、お客様が ExtraView をご購入になってから数日後に、東陽テクニカのテクニカル・サポート (ss_support@toyo.co.jp) がメールでご提供致します。

- license.xml

実行手順：

1. ライセンスファイルを Tomcat の evj ディレクトリ以下の data ディレクトリ (以下 data ディレクトリ) にコピーします。

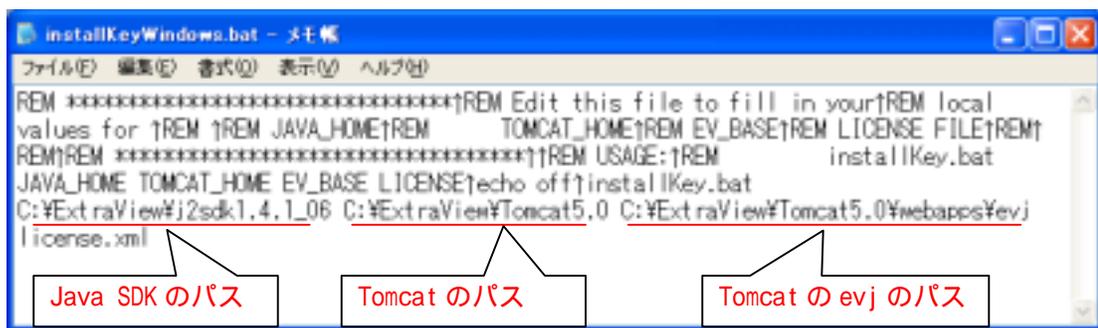


C:\¥ExtraView¥Tomcat5.0¥webapps¥evj¥WEB-INF¥data

2. data ディレクトリの中にある installKeyWindows.bat を右クリックし、編集を選択します。メモ帳の画面が表示されます。



3. メモ帳の画面で Java SDK のパス、Tomcat のパスと Tomcat の evj パスを変更します。



この画面では次のように設定しています。

Java SDKのパス : C:¥ExtraView¥j2sdk1.4.1_06

Tomcatのパス : C:¥ExtraView¥Tomcat5.0

Tomcatのevjのパス : C:¥ExtraView¥Tomcat5.0¥webapps¥evj

4. メモ帳を保存して、終了します。
5. installKeyWindows.bat をダブルクリックして実行します。

実行例を以下に示します。

コマンドプロンプト

```
C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM *****
*****

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM Edit this file to fill in y
our

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM local values for

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM JAVA_HOME

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM      TOMCAT_HOME

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM      EV_BASE

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM LICENSE FILE

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM *****
*****

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM USAGE:

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>REM      installKey.bat JAVA
_HOME TOMCAT_HOME EV_BASE LICENSE

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>echo off

C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\data>C:\ExtraView\j2sdk1.4.1_06\bin\
java -classpath C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\ojdbc14.jar;C:\E
xtraview\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\classes12.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0
\webapps\evj\WEB-INF\lib\SesameUtil.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-
INF\lib\activation.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\mail.jar;
C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\cryptix32.jar;C:\ExtraView\Tomca
t5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\com.microstar.xml.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webap
ps\evj\WEB-INF\lib\Sprinta2000.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\l
ib\Sprinta.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\jtds-1.2.jar;C:\E
xtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\com.mortbay.jetty.jar;C:\ExtraView\T
omcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\com.sun.net.ssl.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\web
apps\evj\WEB-INF\lib\crimson.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib
\domsdk.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\domsdksrc.jar;C:\Ext
raView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\SesameStevensoft.jar;C:\ExtraView\Tomca
t5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\w3cdoml.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB
-INF\lib\xalan.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\lib\xerces.ja
r;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\jaxp.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.
0\webapps\evj\WEB-INF\lib\parser.jar;C:\ExtraView\j2sdk1.4.1_06\lib\tools.jar;C
:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\WEB-INF\lib\kcservlet.jar;C:\ExtraView\Tomcat
5.0\common\lib\servlet.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\lib\common\servlet.jar;C:\Ext
raView\Tomcat5.0\common\lib\servlet-api.jar;C:\ExtraView\Tomcat5.0\webapps\evj\
WEB-INF\lib\evj5023-63.jar com.ExtraView.util.dbpatches.AppDefaultImport -f lic
```

```
ense.xml
<====entering main method of AppDefaultImport====>
AppDefaultImport constructor
Attempting to Open Log File: C:¥ExtraView¥Tomcat5.0¥webapps¥evj¥WEB-INF¥logs¥EV
J.log
ADI: back from preprocess
ADI: Finished importing data
<====finished AppDefaultImport====>

C:¥ExtraView¥Tomcat5.0¥webapps¥evj¥WEB-INF¥data>pause
続行するには何かキーを押してください . . .
```

実行すると、ライセンスが設定されます。ライセンスが正しく設定されたかどうかは、ExtraView へのサインオンができるようになった後に、[Administration] > [ユーザ] > [ユーザ・アカウント・メンテナンス] のページで確認することができます。

日本環境のデフォルト設定

C:¥ExtraView_install¥DataBase にある次のファイルを、C:¥ExtraView¥database にコピーします。

- Japanese_Application_defaults.sql

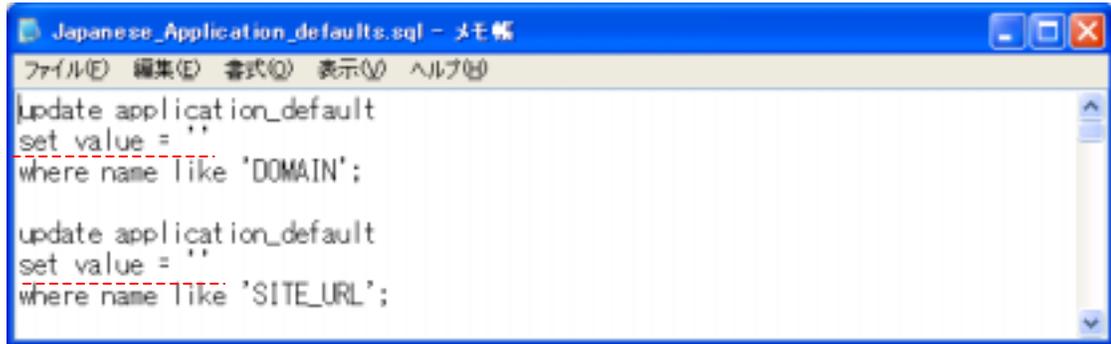
この SQL スクリプトを実行して、日本語環境において ExtraView を使用する際に最適なデフォルト値を、ExtraView データベースに設定します。

実行手順：

1. コマンドプロンプトを開き、SQL スクリプトのあるディレクトリへ移動します。
cd C:¥ExtraView¥database
2. database ディレクトリの中にある Japanese_Application_defaults.sql を右クリックし、編集を選択します。メモ帳の画面が表示されます。



3. メモ帳の画面で DOMAIN と SITE_URL の値を変更します。



```
Japanese_Application_defaults.sql - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
update application_default
set value = ''
where name like 'DOMAIN';

update application_default
set value = ''
where name like 'SITE_URL';
```

DOMAINに設定する値は、ExtraViewサーバが所属しているドメイン名とします。

例) set value = '.toyo.co.jp'

SITE_URLに設定する値は、ExtraViewサーバを示す完全なURLとします。

例) set value = 'https://www.toyo.co.jp/evj'

ここでの設定は、SSLを利用してExtraViewを社外に公開する場合必要になります。

4. メモ帳を保存して、終了します。

5. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus extraview/<パスワード>@<SID> @Japanese_Application_defaults
```

@Japanese_Application_defaults と指定することにより、SQL スクリプト Japanese_Application_defaults.sql を実行することができます。実行例を以下に示します。

コマンドプロンプト

```
C:\¥ExtraView¥database>sqlplus extraview/extraviewpw@ev  
@Japanese_Application_defaults
```

```
SQL*Plus: Release 9.2.0.1.0 - Production on 水 May 31 18:17:33 2006
```

```
Copyright (c) 1982, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.
```

```
Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production  
With the OLAP and Oracle Data Mining options  
JServer Release 9.2.0.1.0 - Production  
に接続されました。
```

```
1行が更新されました。
```

```
18行が更新されました。
```

```
コミットが完了しました。
```

```
Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production  
With the OLAP and Oracle Data Mining options  
JServer Release 9.2.0.1.0 - Productionとの接続が切断されました。
```

ここでの <パスワード> は、Oracle データベースの extraview アカウントに対するパスワードです。「Oracle ユーザ (スキーマ) の作成」で設定したパスワードをここで指定します。system アカウントおよびそのパスワードではありませんので、ご注意ください。この実行例では、extraview アカウントのパスワードを extraviewpw としています。

<SID> の部分は、「新規データベースの作成」で設定した SID に置き換えます。具体的な SID が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。

実行すると、ExtraView の動作設定に対して、日本語環境向けの各種デフォルト値が設定されます。具体的な設定内容は、次のとおりです。

動作設定のパラメータ	値
AUTO_SIGNOFF_ON_USER_EXIT	YES
DEFAULT_ATTACHMENT_CHARSET	Shift_JIS
DEFAULT_LANGUAGE	ja
DEFAULT_REGION	JP
DEFAULT_TIMEZONE	JST
SESSION_EXPIRE_TIME_HOURS	12
DATE_FORMAT	yyyy/MM/dd HH:mm:ss
DB_TIMEZONE	JST
EMAIL_CHARSET	ISO-2022-JP
USERNAME_DISPLAY	LAST

7. 付録

ExtraView 環境のバックアップ

ExtraView 環境をバックアップするには、Oracle データベースを dmp ファイルへエクスポートし、その dmp ファイルをバックアップします。

実行手順：

1. コマンドプロンプトを開き、バックアップ対象である Oracle 表領域のファイルが存在するディレクトリへ移動します。

```
cd C:\¥ExtraView¥database
```

2. 次のコマンドを実行します。

```
exp system/<パスワード>@<SID> file=<ファイル名.dmp> compress=n  
consistent=y owner=<所有ユーザ>
```

(コマンドが長いので 2 行になっていますが、実際は 1 つのコマンドです。)

エクスポートする dmp ファイル <ファイル名.dmp> は自由な名前付けで構いませんが、拡張子は dmp としてください。

<所有ユーザ> には、「Oracle ユーザ (スキーマ) の作成」で設定したユーザ名を指定します。この実行例では、extraview となります。

ここでの <パスワード> は、Oracle データベースの system アカウントに対するパスワードです。この Oracle データベースが「新規データベースの作成」において新規作成されたものであれば、その際に設定したパスワードをここで指定します。既存データベースの場合、具体的な <パスワード> が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、system アカウントのパスワードを systempw としています。

<SID> の部分も、「新規データベースの作成」で設定した SID に置き換えます。既存データベースの場合、具体的な SID が何であるかは、御社の Oracle システム管理者にお問い合わせください。この実行例では、SID を ev としています。

compress および consistent には、固定でそれぞれ n および y を指定します。

exp コマンドを実行する際は、NLS_LANG 環境変数の値を事前に "American_America.UTF8" に設定します。

コマンドプロンプト

```
C:\¥ExtraView¥database¥v502>set NLS_LANG=American_America.UTF8

C:\¥ExtraView¥database¥v502>exp system/systempw@ev file=test502.dmp compress=n
consistent=y owner=extraview

Export: Release 9.2.0.1.0 - Production on Tue May 30 09:40:08 2006

Copyright (c) 1982, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Connected to: Oracle9i Enterprise Edition Release 9.2.0.1.0 - Production
With the OLAP and Oracle Data Mining options
JServer Release 9.2.0.1.0 - Production
Export done in UTF8 character set and UTF8 NCHAR character set

About to export specified users ...
. exporting pre-schema procedural objects and actions
. exporting foreign function library names for user EXTRAVIEW
. exporting PUBLIC type synonyms
. exporting private type synonyms
. exporting object type definitions for user EXTRAVIEW
About to export EXTRAVIEW's objects ...
. exporting database links
. exporting sequence numbers
. exporting cluster definitions
. about to export EXTRAVIEW's tables via Conventional Path ...
. . exporting table          ALLOWED_FUNCTIONS          590 rows exported
. . exporting table          ALLOWED_LOCALE              2 rows exported
. . exporting table          ALLOWED_VALUES              0 rows exported
. . exporting table          ALLOWED_VALUE_TYPE          0 rows exported

...
...

. . exporting table          USER_GLOBAL              49 rows exported
. . exporting table          USER_SESSION              1 rows exported
. exporting synonyms
. exporting views
. exporting stored procedures
. exporting operators
. exporting referential integrity constraints
. exporting triggers
. exporting indextypes
. exporting bitmap, functional and extensible indexes
. exporting posttables actions
. exporting materialized views
. exporting snapshot logs
. exporting job queues
. exporting refresh groups and children
. exporting dimensions
. exporting post-schema procedural objects and actions
. exporting statistics
Export terminated successfully without warnings.
```

実行すると、いくつかの「exporting xxxxxx」というメッセージが、コマンドプロンプトに出力されます。

正常終了した場合、最後に「Export terminated successfully without warnings.」というメッセージが表示されます。

3. 通常のバックアップ手順にしたがって、エクスポートした dmp ファイルをバックアップします。

ExtraView 環境のリストア

ExtraView 環境をリストアするには、バックアップした dmp ファイルを Oracle データベースヘインポートします。

実際の手順は、「新規データベースの作成」「Oracle 表領域の作成」「Oracle ユーザ（スキーマ）の作成」「best_data のインポート」をご参照ください。「best_data のインポート」で示した手順の中の dmp ファイル名を、バックアップした dmp ファイル名に置き換えることによって、ExtraView 環境のリストアを実行することができます。